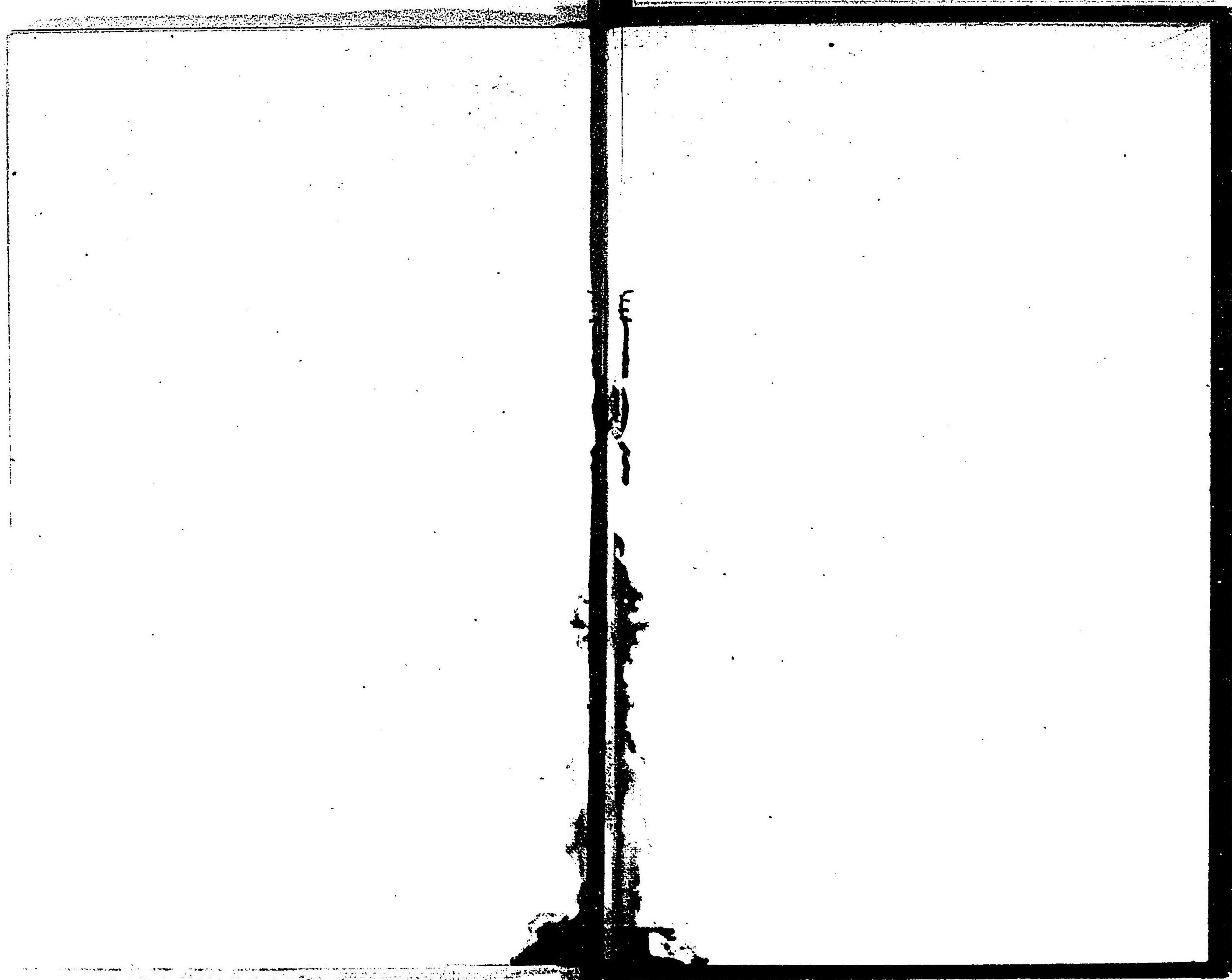


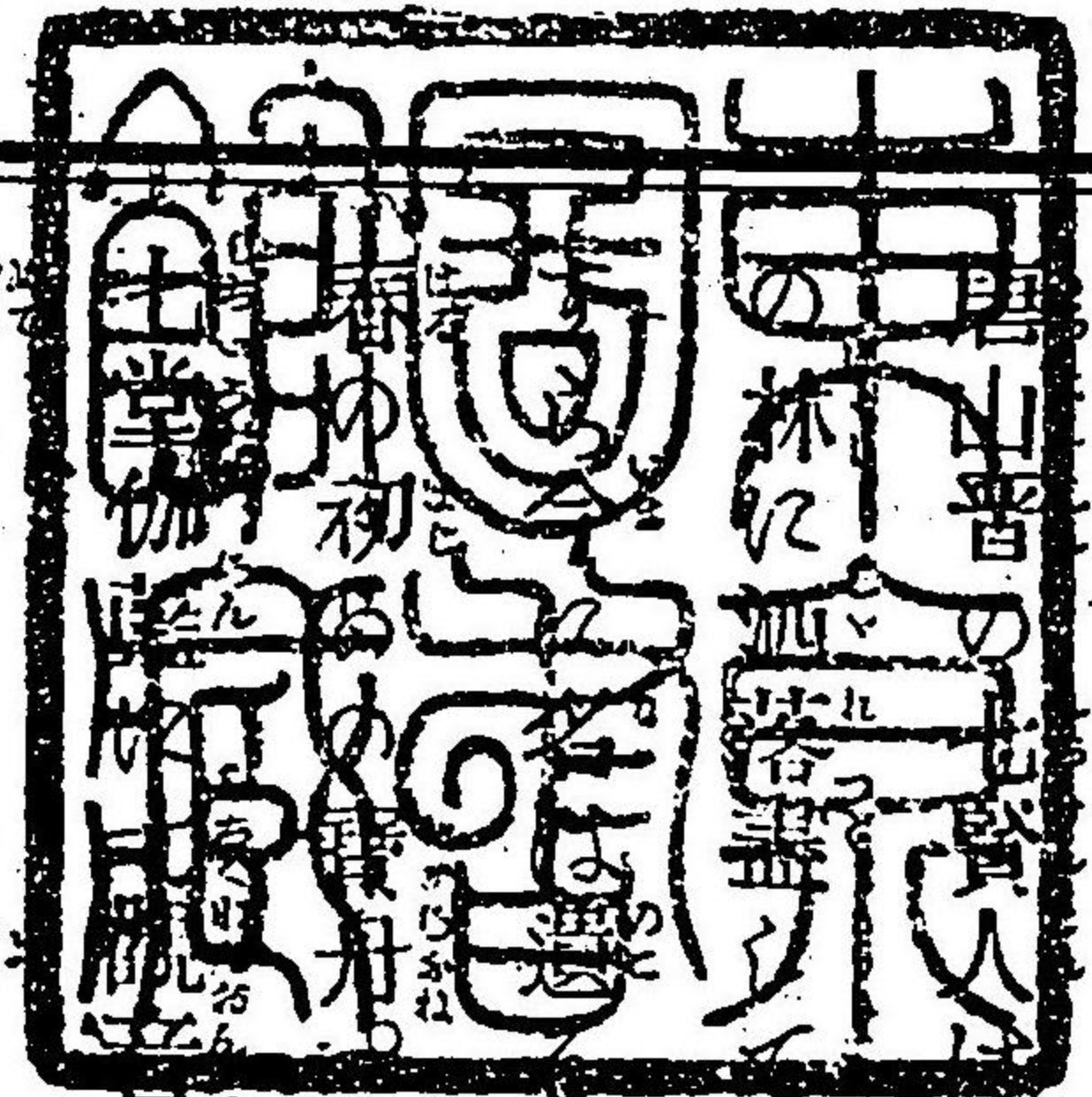
話林竹好  
七偏人





明治十九年十二月廿三日 寄附 1884

林話 七偏人初編之序



唐山晋の七賢人は、  
 豹脚の多き所とも。ゆるや知らせや酔蕩け。竹  
 の林に血を盡して。阮咸かどの三線の。元祖と呼れと蠢毛もの。夫  
 。とかく浮世はをかちみの。笑ふ門に七福や。  
 七種の粥には命を延じ。天神七代北斗の七星。  
 始皇七馬凰の七徳。いづれ七の数をめて。  
 愛たきものと世に知らる。夫からおもひつくゑの上。こゝに影は  
 す七偏人は。全部合せてへん揃ひ。七むつかしきことはを言ぎ。  
 作者が得意の滑稽笑譚。看る人にとけふきたすとは。富貴を出す

特71  
377

○七偏人 初編卷之上

（序）

の詞にかよひて。當り外さぬ妙案新奇。販元大喜の喜の字をは。  
 甚の賀といはふも矢張り七七七の數。この戲書を彫るときは七珍  
 萬寶集る前兆。六十餘州の御看物みか御覽じて可笑と。御評判の  
 高わらひを被るあらは忽に一夜の東風南枝にわさりてひと花ひら  
 く梅亭の。名は高砂の松ヶ枝に。巢をくふ田鶴も久かたの。雲井  
 はるかに羽を翀して。聲も八千代の壽や。盡せぬ春の初わらひ。  
 社中舉ツて金鷲さん。へいお出たう五座位舛としかいふ

丁巳青陽

松亭 迂叟題

美酒百獻 偏人連  
 所見物様江  
 秀上 七偏人  
 密龍百荷 連中  
 風流自遊寄江

七偏人連中一と  
 ちよると目見

喜次郎



跂助

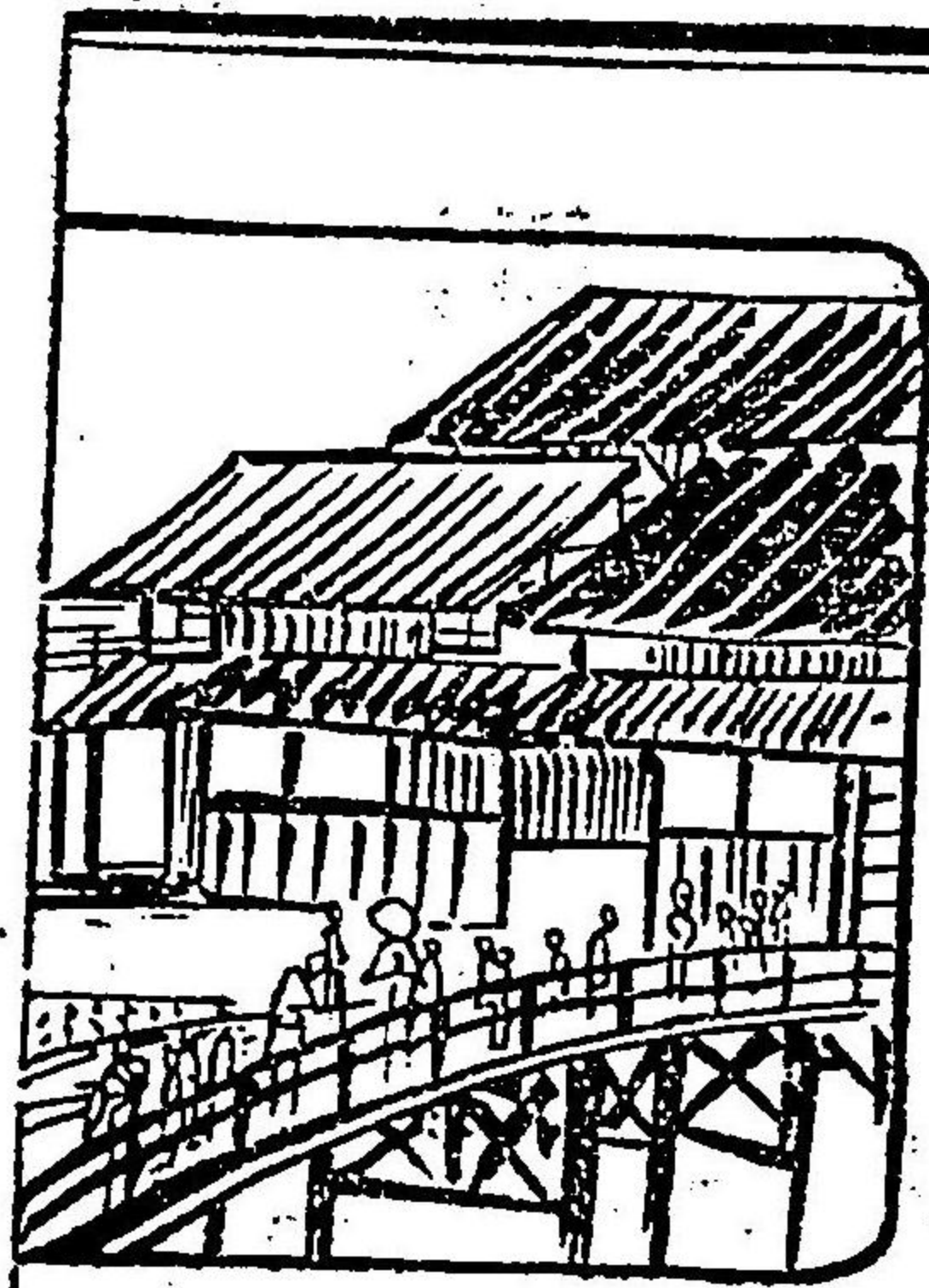




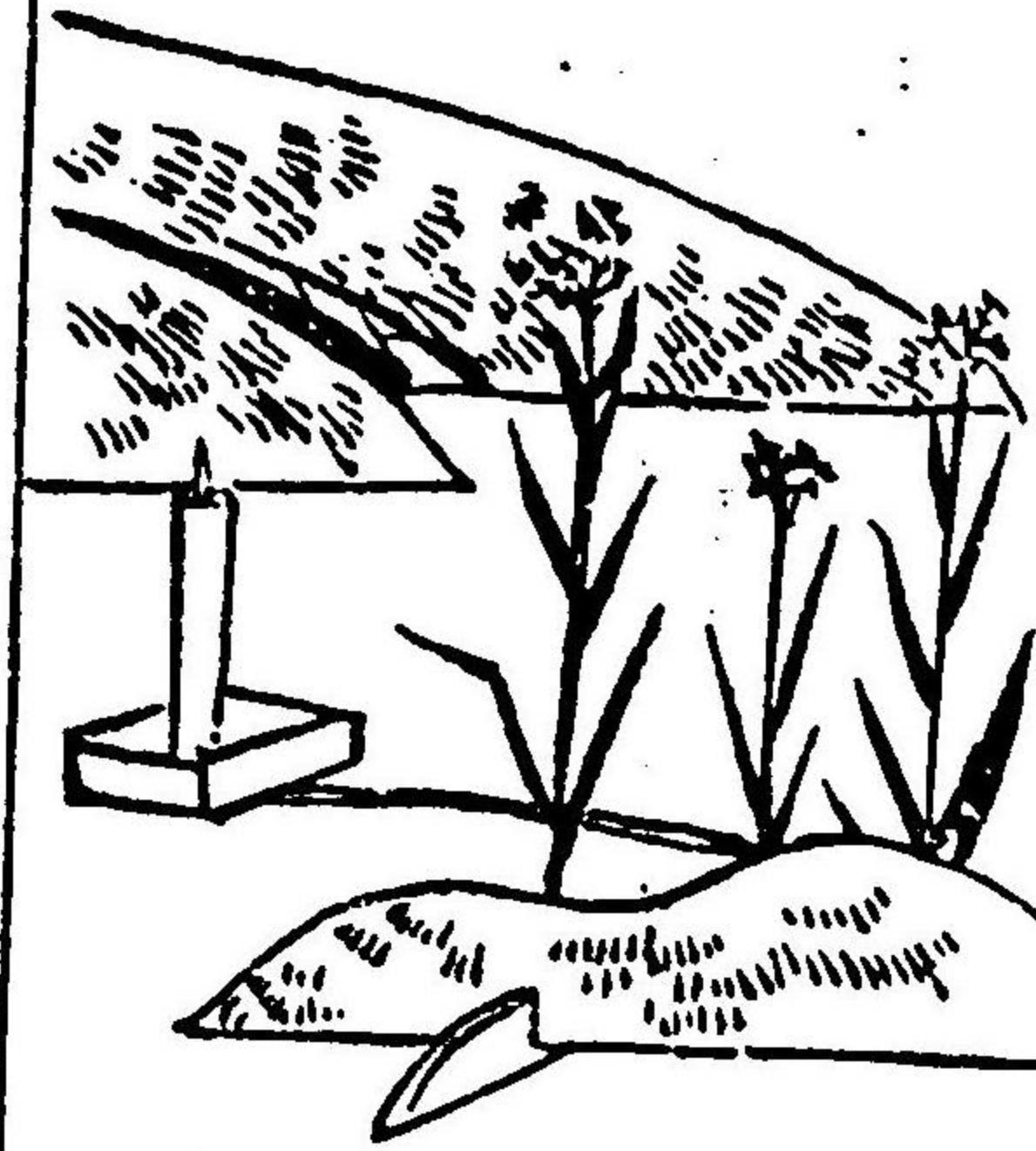
柳橋 能樂 亭の 眺望



女の中ま  
 へまの  
 おやん  
 美富の  
 ままの  
 あり  
 なる  
 の  
 可  
 笑  
 生



茶番 道具立



妙竹七偏人初編卷之上  
林話

東都

梅草金鷄編次

くれ竹の世の人並よ松立て。破れ障子を春に來よけり。げみや千秋万々。まッちやらのゑひやツと。春立かへる朝よぞ。軒端賑はふ七五三飾。夕べア、鬼の提灯を持た子僧の長松が親の名で來る年のれい。大々神樂猿廻し。三筋ならして鳥追ぐまゐる惠方の蘭玉や。一ごに二ご三ご四ッて。道羽子するやら手鞠唄。紙燈のらなりも自然。長閑をさるふ往來の。表浦の五月蠅ど。すご〜遊たる見まきも。浮代と風の柳橋。陳人の子の律義より。老子莊子の割道こそ住居よけれといふ氣よて。萬事茶よまた家造も。有徳の人の若隠居。遊ぶを日々の商賣と外に事なき能樂人。女房があッてハ俗はると。おつな處へ風流がり。舞暮しの喜次郎が火鉢のふちへよりか、り。今年の茶湯の初狂言。不動明王を工藤右衛門よまたて。制高童子を八幡の三郎。矜迦羅童子を近江の小藤太。あすこのせりふを斯付て。此處の身振をわ、ヤツてと。一人監へ居る處へ同氣求じ

る茶茅吉。虚呂松。うら口よりそろりと案内もなく入來り。茶め「イヤか目出とう」か目出とうは座の。茶「チャどうしたなせろんねえよ塞いでゐるのだ」頼を癒るよ仕舞こんで頼ッ端へお手を突かひ棒の老木の松といふ身の宜が其肘が火鉢の縁とちよいと外れると毛の生てゐる藥灌と。茶の沸てゐる土瓶と鉢合するせ。茶「なに」二人が來るうら〜藥灌ましい事といふ様だけれどろの肘がはづれて土瓶とろツちへ倒れる日にやアまで火鉢は無へ。居眠なら晩に寝てからの仕事として春は春らしく些陽氣にやんねへな。喜次「へん元日や晴れて雀の物語。無知短才のやうらハ一夜明るかわけねへ」陽氣がッて居やうけれど。また初春の内は上べを陰よして腹へ陽を蓄ひこむ時節だ。自己なんぞのすることの天地の氣候と同躰して往處が妙といふのだ。茶「上が陰で中が陽ならざッと陰症の傷寒だから。熱がうささこびれると氣がたぢれるせ」トいふ時又も入來るなまけ仲間の下太郎が。明し障子の間より首ばかり出し。下太「彌々浮かねへけりやア家ッ鶴を戸板へ乗せて流すが宜らう。喜次「何だか譯も知らねへで來ると直にさして口

だア 虚言 一ゑ、イ氣の利ねへ。早く這入て後をしめねへと風が来ていかねへ。ろして其面は何ぞたのたい煙にむせた猿のやうに目ばうりまよぼくやッて眞に重忠さまの御知行所と来て。ち、む郡を一圓は領して居るのたせ 下太 「イヤこりやア面黒ひ。人のざんろと岩永處か自分が御面色が悪七兵衛で。おまけにせうくえね清と来てゐるくせに 茶 「いやもし些おとこばの梅澤六郎だけれど左様両方が根をほり底を堀川御所で悪口雑言をいふ若阿古屋なら琴責處か打捨て置ても暮論が出て。今迄節角喧嘩ときたのも皆此方よりの。威とかりてする狐だと思へれたらごまるめへ 下太 「なんの亦茶茶きなどが横合から口と出し。水責火責のくるしきを誦やうと思ッて 下太 「これサかめへ立の唾が霧のやうに家中を舞てゐる。些とまづかよしな 下太 「今虚言松が自己の目をまよぼくしてゐるといつたが其苦だ」といふ譯の夕べの寶船の一けんた。今年こそ宜初夢を見やうと思ッて無上と早寢を仕た處が其宜夢のそんな頭へこそ上たとこへて。五ツの鐘がなり四がなり 茶 「九つがなり八つがなり 下太 「七つがなり六つがなりと

天道さまが昇るまで寢ろびれて。まんじりともえねへと思ひなせへ 茶 「チット待なわれ宜夢と見やうと思ッて。ト言たれいおめへが思ッたれで。此度と思ひなせへ此方で思ふれか 喜次 「東西 下太 「エヘン然れども目れ玉水晶は緒々にても有ざれば。此時とろくと眠り付かと思ひなせへ 虚言 「亦思ふれか 喜次 「東西 下太 「忽然として三神祭は善玉悪玉れどと實珠れ玉が二つ。くもれ中から自己がめを向よる頭れ上へ。どろんくで舞さがり來たと思ひなせへ 茶 「イヤッー思ッて肩が張て立されねへから。こん度の抱こと、まやう 喜次 「東西 下太 「すると一つれ玉の右れ小鬘。また一つれ玉の左れ小鬘へ来てびツたりどくツついたと 虚言 「思ひなせへか 下太 「東西 茶 「ヘン今度の手前で東西をいやアがる 下太 「彼面れ小鬘へ喰ついた玉が肉を煮ぐり。ぐりぐりめりこんで行其痛さ一生無命こらへて居たが。もうたまらまめッと言て眼を醒したと思ひなせへ 喜次 「鬱陶敷思ひせるせ 虚言 「東西 一南北 一氣抜氣れ毒。屁れへ茶れど。思慮れえぐづれど。我吞餓れど。むりれえ無知れと。是れ則 下太郎が身上れ十千で術座ッ 下太





「エヘンさし替りまして十二支を申上ります。先くつていさろく寝ものとの。のろくつて丑ぐらひもの。早き事虎のたねたる處の卯のけものからず。えらと辰の。みたいが病の。巳前のもの。御定りの午。鼻をたらしして紙をつひやす末。所々ごとすべて申。能張で何でも酉。内にいかたどき戌。といふのだ。チャ此奴等ア何とくふのだ。ヘン何時の間よかお畑を付たさ。其處でお肴の重詰におせちの煮ものを帆立貝で蒸ためたやつか。イヤ其中の芋で寶珠の咄しと思ひ出した。喜次「芋をみて思ひ出すのなら寶珠の玉でかくつて放屁の玉だろ。茶「儲今の初夢の咄しの後だ。下太「アアろの放屁の玉いや。放屁の玉ぢやねへ寶珠の玉だと思つたの。目を明て見と野良七めが仕業で。自己の頭へのツか、り岩の様な拳固を二つこしらへ。両方の小鬘をぐりぐりやりながら。ア起ねへか朝寝をするのも方圖がある。是程強くやぞふ極でも根ツから寒ツから痛がらねへの。鎖頭か石天窓か。だんく眞赤に成て押居られた痛さ。くやし。虚呂「さぞ穢ねへ面をしたらうな。茶「さつア百ぐらひ出しても見たか。喜次「うんく

其處で野良七がは前の頭をぐりぐり遠逃か。虚呂「夫だから。ろの敵をとりてへと思ふのだ。虚呂「ろの敵より自己の敵の何様した。早く一盃巡り逢せて呉ねへか。茶「彌目ぐり逢たら助太刃の自己一人でもちさらう。喜次「アアく出来た下太しう一盃やらかしのねへ。下太「そりやア難有おめとよし。喜次「能なくめて大晦日によろくの思ひで取よせたのだ。下太「どれく。成程こりやアがふてきた。ア、何様もこみてく。五臟六腑が立切れる様だ。シテみると此は酒のけんびしか正宗といふ監定では座ひます。ト虚呂松へ指「ぞれく成程よい酒だ。と次たる酒を飲まね巳して何時迄も飲ほさず。是へふしぎア。此通り飲でもく。盡ません。シテ見ると泉川か瀧水だらうとぞんじます。茶「然らば身共も監定に取懸らふな。何さま上ものだもう一盃くん。チャトそらら復お酌だ。奇妙く此度の手酌でやらう。わ、ちります。下太「これさ。一人でろんねへに何様するつもりだ。茶「はて是で七献てうだい、たします。一盃毎に皆美味座い先七ツめかどぞんじますが。みなさま。又私を狸々のやうだと被仰ませう。

虚亡「いやもう誠にお割合のよひは監定で殘心よ堪ました」皆様のは監定。是にて徳利  
 き、酒仕りましては座ひ升。諸今日彼様には集會とも白梅で。一人津九年酒いたして  
 居ました故誠は泡盛をくひまして。何様紫蘇酒にも焼酎にも穿勤ぐらしの手も廻す。  
 然りながら玉縁の御來麟ゆえ何がなごんとどんと戸棚を明て三ッ鱒の處幸ひと彼方の角  
 田川に到來の一瓶。お肴はなくとも元より皆うちり同前の中汲。たゞ濁りのない處を  
 馳走とおぼしめし足元も養老酒となる迄めしわがり。是は江戸一とは保命酒よわづ  
 からハ孫古味淋の酔え迄も難有。鹽醬油又存奉ります。茶め「いよく白酒をなれの致し  
 たは挨拶。甘露酒にたへましたぞ」。搔柑酒があつて十分なるは口上より。なか〜醜  
 の置ません。下太「呑口のまはり掬梅。徳利と聴聞致樽わりの處。此末一文もらひの薦ッ  
 かぶりと成下りの道樂寺を轉づつても口過り出來ると申す。喜次「え、此野郎いんぎの  
 わるい事を言やアがる。茶め「わ、それ帆立貝へ袖が引かゝる」。ろら芋が灰の中へ  
 身を投た。下太「焼豆腐もつゝいて飛込」。茶め「午房く」と沈んたら引摺わけて人參との

ませるが、盛亡「やれ〜田作で目出たがった。灰の中へ落た芋とえさこ上る  
 木「いやいや誠にお節なひ抽口斗り出來るぞ。時を自己へ悔悟左様思ふが正月の重  
 詰と五節句の表者。それには格本妻置の祝ひ。さういふ何様事と家の人達でも長い師  
 を三袋だか三袋だか。是計り古風のすたらまは居る。有難〜。ねんが。虚亡「  
 ッたいお節といふもの。下茶の吉のやうな意地地。お節めちやアある  
 めへ。お節だからお煮染の爲だらふ。喜次「え、何か虚亡公のハ説があるぞ見へる。下太  
 「さういふお説ぢやアあるめつお節だらう。下太「えい、あやせるな」。さては節の煮物  
 の品。田作は焼豆腐半斤房人參といふが世間お節。おでこで田作は元氣だから魚の  
 中で一ばん中等だ。又焼豆腐の中はすか並居るだらう。芋半斤房で腹を脹らし  
 田作の下利〜焼豆腐の中の〜。様な赤い顔をするなどいふお  
 煮染だ。喜次「ヤレ〜。種はお煮染だ。下太「お節の煮物。お節の煮物。お節の煮物。お節の煮物。  
 めでも有めへ。屁ましめだらう。下太「チャラろりやア宜が自己は、わすれた事をまた〜。聞



〇七偏入

初編卷之上

〇十七



〇七偏入

初編卷之上

〇十六

昔は幼き  
よりあは  
ききか  
ききか  
ききか  
ききか





「新製の羊かんで香煎でもねへの茶本名をわかす時ハ下鮎の香の梅かんとでも言うな嘘を折の中へすりばと幾めこそ又香煎の筒の中へ七色唐椒の大辛と云のを請ふそと来ぬだ其處をなく葱の用意もあるかならや直又鍋焼の七色唐椒を掛るといふ段取れ」

「茶一丁下鮎をなせ」

「はんに喜次さん」

「折とかけ出したせ」

「二所の口から二人の知れなげな様と見て居る」

「お樂しむ。例のおかくし葱の面白盡で。さぞおもて被成た事や」

「あなたも言てる無たな孔方とあげりて置やした。喜次」

「折の書を明て見て成程おつな色」

「出来てゐると言ながら臺所より庖丁と持來り。六七分ぐらゐな厚さよすかりくと切ならべ。菓子鉢にのせて其處へ出し。鐵瓶の湯を茶碗へつぎ彼香煎をより替てはい是れ些多すぎた。私の風を引て居て匂ひも何もわかりませんが宜か悪か。一ッ上ッては覽なさい」

「いや玉手を汚して恐入た。これい。なにやたいがひな煎茶よりハ。かへって香煎のところが宜んでげす。いひながら其ゆを一口ちよいと飲。何だか可笑顏をえて口と少し尖せ。ヒヨウ〜はう〜と息をそとへ吹て居る。喜次郎ハ氣が付ねて二階に見て居る三人ハ吹出すばかりの可笑さ。ヒツとこらへて箱々聲」

「香煎より七色唐椒のところが利がよろまんございますッ」

「下鮎」

「山椒も中に這入て居升ッ」

「はう〜では座いませう。ア、おかし」

「三人ハ袖をひッぱりひざを突。かたづを飲

ら一つあがってほらんせへ。併し食物本草とも言れるぐらゐな大愚先生だから此菓子もモ一は口よ觸たで座ひやすだらう」と言れて例の知たふり「此赤練で座ひやすか。ナヨサ是の然る處でまた賣ださねへのだが。先大人のお風味を加ふと言て出しやまたから喰てみたが。おかく妙に喰せるので其後一兩度取寄て人にも振舞やしたのサ。そして此香煎も能くお手に入やした。僕さへ他處で一寸飲た迄の事。お恥もじながら出所だに定かならねバ流石の大人だ。妙に何歎がお早く集る」と言ながら彼菓子鉢のやうかんを一切取て口へ入れ。ぐまやりと嘴と生臭さ匂ひがふんと胸へこたひり。煉とも付す蒸とも付す變な味の是は異だと顔としかめ。頬ツペたを脹らしてむぐぐやれを吐出す譯にもいかねバ飲込でまわんとするに。ぐづくと咽喉のみなッて下へおりぬを思ひきッて飲と彌々變に生臭ければ。げいげッ突戻すを眼を白黒して亦飲と。胸のわるさに堪へられねば飲かけ置たる香煎湯をわけて、取て一口にがふと飲と先との違ひ底のはうに。ごたくとおどみて有し唐椒の種が一度に口へは

いれバ。アッと言ッて反返りあきたる口の居るをひツくりかへし尖らせて。はうぐすうぐふらぐと息を外へ吹て居る内。涎のだらぐ願へつたわり。鼻の上よ汗をかき。額口より湯氣を立。赤くなッて居る處へ野良七といふ能樂連中「ハイ色師の問屋で座い。御慶やし升と言ながら委細かまづ上り来り。ホイ是は大愚先生。大分よいお色で座い。喜次さん連中のまだこねへのか。左様さ来たとも米ねへともごッち付すだ。野良一ハテ跋助や飛八の自己より先のはづだが」と首をまげて監へ居る。此時二階の三人の先刻よりの可笑さを堪えかねて。ぶつくと吹出す口を押へたり押へられたり足踏して面白がッて居る處へ。又野良七が来りし故下太郎の天窓をた、さ、さ、こらぐ。妙だぐ夕べの寶珠の玉の意趣が返せるぞ。今よみな。あの野良七が七色の香煎湯をぐいと飲の。龍宮城の煉羊かんをめぐりと喰ッて。げッぶとの難有山。こんな事と知ッたら牡丹餅だと言ッて馬鹿野良七馬糞でもちツと持て来れば宜かつた。いやア何様か彼奴も飲せられるふな景色に成た。アレ喜次さんが火鉢の引出から茶



碗を出すだ下太さか「其くせ喜次さんきじさんの自分じぶんじやア飲ねへから氣きが付て居るのかしらん茶ち、  
 彼人かのひとの「盃さかづきやるといつても。あの通り飲のみも喰くもまねへが。どてもこゝろの事こと又喰くば宜いと思おもッ  
 てゐるのだ。虚うつ「ろりやア宣いが餘あまり笑わらったので小便せうべんがしたく成なつてきた。下太さか「エ、もう些ち  
 だ堪こらへて居る。虚うつ「何なに様も仕方しかたがねへ我慢がまんをすべし是これサ聲こゑが高い。シツシツ。附つきと餘あま  
 と。どせうが安やすい。ししッし。下太さか「すてきよ古ふるい。マツシイツと譯わけらぬ事ことを言いながら彼かの三さん  
 人にんの野良のら七しちか容ゆる子こ如何いかと窺うかがひ居る此時このとき下の座敷ざしきに主人あるじ喜次郎きじら大愚だいぐにむかひ。喜次きじ「時  
 又先生せいせい香煎湯かうせんとうをもう一つ献けんじませうか。ろして羊かんやうかんの如何いか。注意ちうい又入いたらは遠慮えんりょな  
 すつてはいけません。サア。何卒なんぞ飯上めしあがつて」と二切ふたきり割わりり挟はさんで出す。大おほ「さやく。夫おれ  
 へ差さ置おけて。自由じゆうにてうだい。喜次きじ「それ。夫おれでも折角せつかく挟はさみましたから」と無む差さに強しんられよん  
 處ところなく手ての平ひらへ請取うけとり「なにサ彼様あなさまな珍物ちんぶつを必かならずなく。むまやりくと下司げしはるやから  
 も有ありやすが。得手えて左様さよういふ白痴しれものにかぎつて一つ三夕さんせきする初はつ茄子なすより一山ひとやま三文さんもんの茄子なすの  
 はうが美味うまいさぞ。とんだたの事ことを言いやす。實じつに玉たまも瓦かわらも辨わなくやられた日ひよやア新しん

製せいだの初物はつものだのと骨ほねを折をがもの。座ざやせんのサ。喜次きじ「野良公のらこう是これの新製しんせいの香煎かうせんだと云  
 から大愚だいぐ先生せいせいも上あたのたぐ。お前まへも一いち碗わんやつて見みねへか」と茶碗ちawanを取とり出し搦なをつい  
 で後のち香煎かうせんを振ふまふり。サアと出いせば野良七のらしちが「おッとお茶ちawan臺だいで。てうだい。エ、これの  
 左様さようお見苦みくるし手てで恐おそれ入いります。ナニサお菓子かしの自由じゆうに大おほき左様さような處ところを搦なでいただ  
 き升ま。必かならずらさく。澤山たくさんおかまひ被な成な下くださいますな。イヤこれの熱あつい湯ゆだ」と彼湯かのゆの茶ちawan  
 碗わんを下したへ置おく。大愚だいぐの挟はさんで貰もらひたる羊かんやうかんをもてあまし。指さの先さきにて押潰おしつぶしたり丸まる  
 たりして居ゐたりしが兎角うまかくに生臭なまぐさ匂におひがすれば何なに必かならずなく其手そのてを嗅か。顔かほをまかめてわき  
 を向むく。野良七のらしちの氣きが付つか「ぞれ。もう飲のみぶろに冷さめたらうと茶碗ちawanととり「成程なほほどこれが  
 新製しんせいの香煎かうせんか」と言いながら茶碗ちawanを鼻元はなもと又押付おしつけて。ふんくと嗅か。野良のら「ハッ。エ、ちくまや  
 う。エ、畜生ちくせいめ。あぶなく膝ひざへ懸かすどこだ何なんだかめッ法香ほうかうばしひ。こい何なんア見体けんたいといひ  
 匂におひと言い。〇で七色しちしき蕃椒ばんかくといふ搦な梅ばいだ」と一口ひとくちにぐいと飲のみ。野良のら「あ、ハッ。ホッ。是これの辛からい  
 い。はう辛からいすう。あ、辛からい。早く口直くちなしに其羊かんそのやうかんを喰くせてくれ。甘あまト

味で口の辛を直す氣なれば野良七の菓子皿よめる羊かんと三切四切一處よ摘み口の  
 中へ。へッ込であぐりとやるとぐんにやりと血生吹きに野良「ア、こりやアなんだ。あ  
 、ア藝なものぞ。ゲッぶく」と言ながら椽側へかけ出し。かみちらしたる鮭の身と吐  
 出すを見て。先刻から胸の悪さところへて居た大愚も堪へられず顔をしかめ「大  
 ぶくくこれは。ゲッ。げエらゲッぶく」とはうづきはどの涙をおとし。この兩人が  
 苦しむを何様ぞと事と喜次郎が譯を知らねば有漏くするを。兼備句で先刻から二階  
 の口より見て居る三人。げッぶく」と込めける。笑ひと外へもらさると眞赤に成て堪  
 へて居しが。今野良七が。げッく」と苦しむを見て下太郎の我をわすれて飛で起し。妙だ  
 くど拔足しながら踊り跋る。茶「エ、其様にどんくやめて下へ聞えるといかねへわ  
 「ト腰のあたりと茶め吉に突飛されて下太郎の涙踏くく」とよろけかへりて虚呂松が  
 寐はらばひたる脊中の上へ大きな五体で尻餅をどっさり突と。虚呂松の先程より堪へ  
 て居た小便なれを我しらず推れとはづみに。ッ」と出る故。顔をまかめて身とふるわ

せ「ア、大變だア早くどかねへと止らぬへア、小便が出るぞいへバ。ア、申盛ぢ  
 やアねへア、くくるしいと。言を聞て下太郎の。どぞと尻へ力を入。」「まかし恋氣  
 な年増にでも斯様いふめんべゑに。やられたらまんざら悪くもあつめへ」と上からぐ  
 いく推付れバ。虚呂「ア、小便が出るぞ云ふに意地の悪。ア、ン出るといへバ。エ、此  
 野郎どうするか見やアがれ」と一生懸命よ上る。この勢ひに下太郎の後の方へ飛  
 され。先刻下からはこび上たる膳の處へ倒かへると。猪口も徳利もころがり出す。虚  
 呂松の尻ッ放腰をしてア、と身振ひしながら「エ、くくめへまじい意地まがり  
 野郎。こんな小使とたれさしやアがッて常談も時による。何様ぞたら宜らうと困り  
 きつたる顔をして監がへ居れバ。茶め「なんだ小穢ねへ顔として實止に小便をやらかし  
 たのか。虚呂「ッウーと出たからマアやらかした様なものだ。下太「やらかした様なものな  
 ら衣物の巾まが濡れて居なけりやアならねへはづだが何事も芝無じやアねへか。虚呂「其  
 處ハ御方便なもので衣物はまくれて居たから濡しやアまねへが積鼻揮ハ。サットこい

つも斯様いふ事と虫が知ツたか今日ハ迄のて居なんだッけ「其様なつじつまの谷  
 ねへやし口と云が有者かコレ此處にある徳利の酒をいつの間よか此様に疊へこぼして  
 置いて小便など、偽り。此下太郎が欺ひかれる様な甘口ものと思ふか。一軒四百の小便  
 なら彼様して掃除をする。勿休あいと言ながら虚呂松のした小便が疊にすこし溜ッて  
 居るを。酒と思へば平氣にて口を當て。ちゆット吸ひ「やア。へッ〜」ひよッ〜こり  
 やア實正の小便だ、ア、臭い。げッぶ〜。たまらねへ。げッぶ〜。誰か早く。  
 うがひの水を持って来てくれ。ア、げッぶ〜。茶め「エ、穢ねへ何故人の顔へ唾をす  
 るんだい。下太「顔へ唾處か口の中へ小便をする奴さへあるい。茶め「何處の國に人の小便  
 へ口をたれ込やつが有もの。下太「夫だッて自己が小便へ。茶め「手前が好んで小便へ口  
 を仕たのじやアねへか。虚呂「小便へ随分丈夫に口を仕て置たけれど伺匂に成て居る脊  
 中の上へ。あの大きな尻をうんと乗せられたもんだから思はず知らずツイと出たのだ  
 が。まだしも眼の玉が出なくッて仕合せだッた。下太「何様だ此節の小便の胃の

臟に熱が有と見へてすこし濁りて居るうら不離の様な呑口に往めへが。宜りやア  
 もう一合お燗を付やうか。茶「濁りて赤い小便なら味解だと思ひそらなもんだが夫を酒  
 だと思ふのハ矢張醸みばかり飲つて居るせへだらう。下太「何方も此方も人の胸の悪  
 いのだと思ッて平氣な面でわやアがる。茶「何様して平氣な顔として居られるものか先  
 刻から眼を細くえたり口を大きく明たり種々な顔をして笑ッて居るのだ。下太「から成  
 からの百年めだ仕方がねへ下へ往て口をゆすひで來やう」と階下の段を下りにかゝる  
 を虚呂松が。何らまへて。下太「コレサ半抱がひのねへ下へ往れるくらひなら先刻ッから  
 悴にもされるやうさ苦しさをさせて置ねへい。下太「夫だッて何様して口を此儘で置  
 れるものか。茶「此儘で置れずい。お結びいでもどて置たら宜からう。虚呂「しめた〜宜  
 ものがある。と喜次郎が机の上より筆洗ひの鉢を持來り。虚呂「姉だ〜入たばかりのま  
 かも若水「どれ〜成程〜いつア天のお助けだ。と彼筆洗ひを持窓を明て首を出し頻  
 りにぐづぐづ口洗をしながら「小便をこぼれし酒と思ひし徳利と看ざる不調法也」

斯る二階の大騒ぎを知るやしらすや下座敷の彼の三人の漸やく落着き香線ハ七色番椒やうかんハ鮪の切身と生が解れば今さら又知った風せし大愚も流石に問の悪ければ。物又仮付早々に暇と告て歸り行をのみるより二階の虚呂松ハ階子の段と墜下りて急ぎ厠へ行んとするを野良七ハ捕へて胸ぐらと緊と取。一人に鮪を喰せたり此野郎の仕業だらうサア何様するうみやアがれト揺ぶりまひせバ虚呂松ハ「コレサそんねへにエ、モ一息さへ徐として居るのだア。其様を甘口な言譯で放すものか。サア何故人に彼様ものを飲しやアがった。コレサ、揺ぶりちやアいかねへ。アレサ出るから止まどいふのだ而して自己が知った事じやアねへ。のう喜次さん。眞正ま宜しくねへ洒落をまやアがる。大愚だから宜けれとあれが外の者でみねへ何様かハ氣の毒だか知れやアまねへ。野良「夫りやア進へねへ。おんにしろ以來のみせしめ此儘まやア腹が愈ねへ。サア何様だ。あやまつたか。虚呂「コレサあいたく。此野郎ふざけるか。方と入ると猶たまらねへ。あやまつた。ト身振ひまながら青く成故。野良「仕方がねへ。丁簡し

てやらうと突飛されて虚呂松ハ。周章厠へかけ込たり。このもんちやく如何と二階の上より見て居たる。二人も願て下り来り「何様だ野呂公新製のやうかん美味かつたり野良「どうりで夫上が騒しいと思つたら何疋も居のたま。茶め「そりやア宜が喜次さん大變があるせ。喜次「何が大變だ。茶め「何が疑かいまのどまんの一件だ。喜次「何様したと。茶め「イヤサ下太がどまんと尻餅を搦と虚呂がつい小便を仕たど云事よ。だが其小便ハ大概嘗て仕舞たから宜けれども。一度疊の清洗ひとせざアなるめへ。喜次「眞正か。茶め「論より証據だ。二階へ往疊の濡て居る所を嗅で見な。喜次「困らせるせ。ト二階へ上る。其時虚呂松も厠より出来り流石も拾も撒れぬ故水を汲で持上り寄てたかつて漸々ハ掃除として仕舞。茶め「自己ア湯も往て来るせ。小便を嘗た唾を吐かけられた面の皮の洗濯をして来ねへ。ト自己ア何分にも氣が濟ねへ。虚呂「自己も往て清めて来べし。下太「自己も夫赤やア一所より往。ト手拭ひ下て三人が「喜次さん一寸お湯へ往て浴て来るせ。喜次「二階の疊も連れて往て洗つてやりて呉ねへか。虚呂「いや。アリヤア矢張後へのこして疊だけ

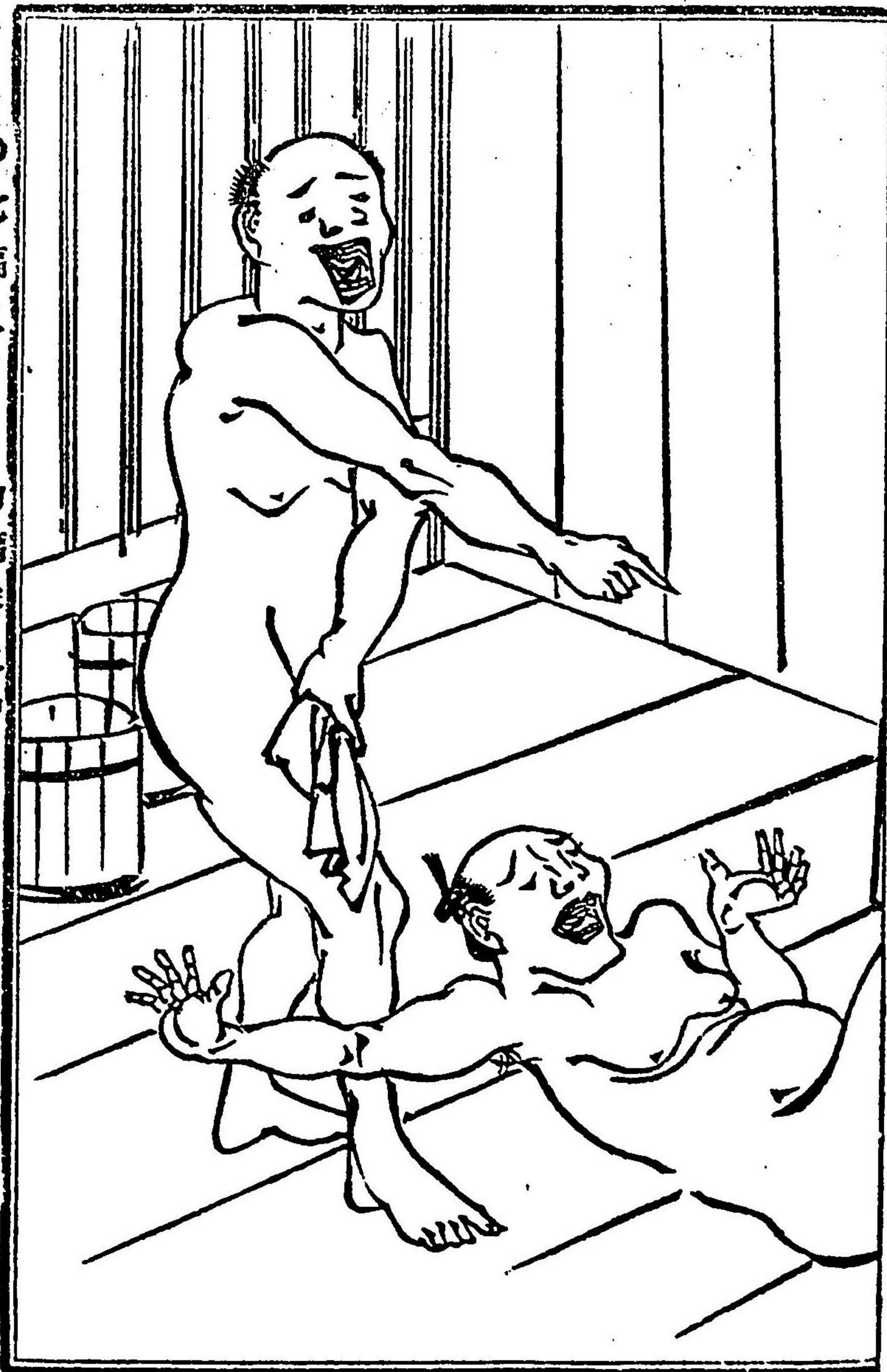
にずるがい、再次「左様すると」虚言「塵こそ今の仇なれ見染て染てつウイイころサビイ  
寝エの」下太「エ・氣障な身振をまやアがる」これ是より皆々打連てぞ出行ける

妙竹 七偏人初編卷之中  
林話

東都

梅亭金精編次

さても彼三人の町近き湯屋へ行。衣服とぬぎ捨ろの儘よ柘榴口へかけ込へ風呂の中  
の賑しく都々一なと唄ッて居れど。人の足さかに五六人思ひの外にすいて居る故三人  
の手足としめしながら「どうてさく」虚言お客が少く湯がたッぶりだ。下太「成程虚呂印  
の何様してろう黒からう。何處も彼處も眞黒だなア」茶め「彼處が白ければ。お公家さま  
だア」下太「申だんぢやアねへ三世相と出して見な。お前の前世に佛の奉加帳と書墨と三  
升盗んで出来も仕ねへ付文と書た報によッて今生へ眞黒に生れて來ると書て有に違  
へねへ眞よお前の体といふのぢやアねへ黒だと言のだ。湯へ還入よりやア海の中へ  
這入てさん瑚樹と見付たら宜らう」虚言「是が否味のねへ十寸男色とやすのだ。何れでも  
黒くなくッていけるものか。先神に大黒天。佛に黒本尊。歌人に大伴の黒主。知者  
に黒う源の義經。黒丸の腹の痛を治し。黒堀の盜賊の難をふせぐ。物の上手を黒人と



いふ。黒の羽織に。黒皮おとし。(澤るり)「頭巾をふかに身をかため。通ひなれたる朱塗の露。一たるかあきたの時鳥。初春かけたか羽衣の。松の天女のたむれを。三穂にたとへて駿河の名ある。雲のふせいのいや高く。」下太「夫ぢやア其積りで道人と仕様まづ比湯ふ免。ア、なか／＼わついで。成程沸た。万歳。やたらに馬鹿氣で焚んます。」下太「(長唄七夕娘)」さ、の裏業に吹風の。秋といふ字のたが身に。悪くやえよしの片心」(勸進帳)「露けき袖やまぼるらん。時しも頃の如月の。十日の夜。(七福神)月よみ日よみ。ひるこそさのどさうけたまふ(長唄鶴龜)山河草木。國土ゆたかよ千代万代と舞たまへば。」下太「(傾城道成寺)月の光もうつるや夢の。くさだめなきころあやましき「チャン」時にそれの宜が茶め古の何處に居か大分まんびやうな馬鹿野郎だと言つ、向ふをみれば。風呂の中段へ片あしかけ。へんな身ぶりをして。にらんで居るゆゑ。」下太「何だ茶め公何様かまたか。」茶め「燕雀なんぞ大鵬の心を知らんサ。彼様いふ形をして居るのが其方なんぞと譯るものか。是れ自己が工夫をして思ひ付た事があるから。やッて

見てゐるのだ。」下太「足下の工夫から。どうせろくな事ぢやアあるめ。」茶「へん漢の忠相。武候諸葛孔明。南朝廷尉楠河内判官正成といへども未だ心の付ざる。和漢未發前代未開の珍藝だ。眞に妙な處へ氣が付たぞ。我ながら感げさに堪えてゐるのだ。」下太「何だか前文と聞た處ぢやア餘程の事らしいが。本文の小便の泡程にも往やアしめ。」一「その腕組をして米を搗様な真似として居るのが楠も孔明も氣が付ねへ前代未開の珍藝と言ふのか。」茶め「其様に氣が標るなら言て聞せやう。エヘン。先彼様ろくよ立て兩方の腕をしつかりと組。十本の指を皆脇の下へ仕舞て置て。足計りで湯の中へ這ッて見せるといふ妙藝だ。」一「ハ、ア其處で中段へ足を乗せて。ちよい／＼と跋て見て居るのか。チャット浮雲なしまたべんたらこと。米も其位に搗と餘程の上白に成たつらい。ロどっこひ／＼「チ、ちんちり／＼評判者やア」ト下太郎虚呂松が。ませツかへず九耳にも懸ず茶め吉の。一人眞に成て腕組となし中段迄上りたれど。並より深き風呂箱故。なか／＼這入兼たるを亦種々にからだをやめて。漸々に上の板を踏ぎ中の段へ

足を踏かけ。シメタと言ながら足を上げて這入んとする。その柏子に中の段の足が這つて。どんぶりこト横さまに風呂の中へ轉り込ミ。ア、フーぶくくくトもがき廻る。ろの手先が傍に這入居る人の罌丸へさわると。其儘緊かり捕る故。先の男の顔としかめ「ア、ッあ、痛。此愚鈍め何をすると漸々湯から首を出し。立あがらんとする横ッ小びんを力まかせに突飛されて又どんぶりと向ふへ倒れ。角の方迄押付られ。又都々一を唄つて居たる人の天窓へ否といふ程湯をわびせれた。物をも言はず彼男の両手を出して突飛せり。奥の方の板羽目へ。どつんど云程頭を打付。ア、いたい。此奴等ア何をひどい事を仕やアがると眼をひき出せば彼男「ナニ業でも食へ業とりめ。何だ人の頭から湯をわびせやアがめて。ぐづぐづ言やアがると獅子鼻を捻り切て。眼鏡やの。かん板にするぞと」言つ、ずつと立上る。茶め吉も勃然となり。茶「なに自己が鼻が獅子鼻奇ら」ト言ぢがら一寸見れば。角力取供言へ程な大男故。きよツとして後の方へ尻込しぢがら「なんの獅子鼻、ツ鼻の鼻だ。てめへの鼻が高いツて其様に誇る事アねへ是

でも随分匂ひのすらア」と何かぐづぐづ言ながら餘處の人の蔭より。ころくくと逃上り流しの角に何くわぬ顔として洗つて居る。下太郎と虚呂松の頻りよぐづぐづ笑ひながら續て後から上ツて来て。下太「茶め公かんしんく真に前代未聞の珍遊だ。べんたらこの仕打からどんぶと中へ落て。其方へ突飛され。此方へ突飛され。一番の打留に羽目へこつきり頭を打付た處なんざア働いたものだ。芝居ですると彼のこつきりが幕切の柏木たらう。後生恐るべし人の見かけに背ねへものサ。自己ア彼位の離れ術ぢやアあるめへと思ツた。茶「エ、人の愁ひと見て面白そうに自己が樂みにまて居やアがら。かう見へても思慮がなくツて何様するものか。泡を吹せる様な仕返しをするの何方すの内には有のだ。一夫見ねへ亦前代未聞の工夫をきたしたらう。智者の智者だアけれど薬箱を持ねへ唐頭と羽めへ打付た時なんぞに不自由だ。茶「へん其様見くびつた事を言て後で吃くり芝なさんな」と言つ、脇を一寸見れば突飛したる大男の何時の間にか水船の方へ来る故。茶め吉の周章で風呂の中へ馳込。角の方に縮んで居ると暫時して。又





妙竹七偏人初編卷之下

東都

梅亭金鷄兩次

さても喜次郎が家なる能楽亭に彼三人が沐浴するとして出往り後ハ嵐の吹し後のそとく寂寥とする其拆から裏口の戸を瓦らりとあけ「へい鳥渡屋で座る升只今お客がいらッまやいました」と言ながら出す客の言付しひる蓋の酒の肴に喜次郎の首をかしてハテ誰だらう 野良「一跋助か飛八の内サ」喜「彼奴等にまてハ」ちと氣強名古屋で代の都合が出来たと見へる 喜次「ろりやアい、が持て来たものハ刺身に煮肴。鍋ハ何だ。白魚よ生海苔。貝のえしらに萌の三ツ葉も。些代脈の調合めくのサ」野良「どれ〜代脈の調合を一ツくわせてみな」ト鍋の中へ指を突込ア、ッ、ッ、ッ、ッ、ア、熱カッた 喜次「コレサ何様したものだ。ろして汁もの、中へ手を突込奴が有ものか」野良「左様いふけれど刺身に煮肴鍋斗りぢやア淋しひから。指の先を焼肴で。少々お問にも添るつもりのだ。」と言たらお前が成程お前も粹の酢の物だ。ぬたよハ置ぬと潮から興るだらう

喜「なんの廻りもまねへ口取で。言譯をまたし物だ。かへッて味噌汁とつけるのだ」野良「チャ太平なことをいふの」と言ながら廣蓋の肴を座敷の方へ持こむ。此時表の格子戸が瓦落りバツまやり。どたばたとするかと思へバ茶め吉ハ思もせひ〜とあひたしく履物を揃んで乗上り。周章で雪隠へ馳込たり。喜次郎野良七ハ此有様又忙然とあッけにとられて見へ居たりしが少し聲と低くし 喜次「何様したのだらう。何でも只事でのねへと思はれるせ」と言ふを聞て野良七も思はず小聲になり 野良「左様さ目の逆ザツためん梅から。帯の結びやらとみると狐でも付たのぢやアねへか」喜次「何様夫だ。夫に違へねへ。察する處其狐が犬に追れたのだらう」野良「何にまても此儘おやア譯らねへから一番索引で見様」茶め公お前ハ何様かしたか。茶め公といへハ是サ。茶め公何故返辭をしねへのだ」と言れて茶め吉ハ雪隠の中よりちいさな聲で「お様大きな聲で自己が名を呼ぶと追蒐て来た奴等が立脚をして居り〜ものでもねへハ。何にしても咽が乾付やらだ。茶でも湯でも一盃持て来てくだッし」野良「エ、愚鈍な雪隠の中



○七偏人

初編卷之下

○四十七



○七偏人

初編卷之下

○四十六

へ湯がはこべるものか 喜次「ナイ茶め公鼠の天麩餅か油揚げの極上物の何様だ 茶め「エ、  
 煮れッてへお前たちやア狐にでも化されたのか。雪隠の中で咽喉が、わひたのよ其様  
 な物が何よ成のだ。と言れて二人の顔と見合せ又々少し小聲ななり」アソ彼方で自己  
 達の事と化されたんじやアねへかと言やアがる。成程狐といふもの、早く人の氣をと  
 るものだなア 喜次「何にまても茶を呉るの湯を呉るのと飲たがる處を見ると酔醒の狐  
 だらう 野良「左様サ後引の狐ならもう五合と來るところだ 一込な事がはじまったのう  
 野良「楯籠った處が悲ひから蕃椒でいふすといふ譯やアいかずサ 喜次「雪隠を住居に  
 したとこを見ても何でも葛西街道の狐だらう」と二人の少し不氣味になり竊々評議して  
 居る處へ。下太郎鹿呂松の二人のかけ來り 下太郎「チャ茶め吉のまだ歸ッて來ねへか 野良「  
 歸る處が大騒ぎじやアねへか。これに捕付ての」と頼の處へ手を遣て狐の真似をして  
 みせれば。エ、と胸り 下太郎「何か真面目よなめて謀るせ 喜次「眞正だよ 下太郎「夫だッて今湯  
 の中で」ト是より彼喧嘩の次第をくわしく晰し」といふ譯であふなく捕へられやうと

いふ處を逃出して來たのたものぞと咄すを聞いて喜次郎のふんと言つ、手と拍き。夫  
 でよめた。相手が追懸てくるかと思つて履物を懐へ入て雪隠へ逃込みやアがったのだ  
 下太郎「こまらせるせ茶め吉めへ雪隠へ楯籠ッていざと言たら尻ッ放と打出す了簡だら  
 う 下太郎「違へねへ尻け田尻の頼が尻ん目山か。尻ん能寺氣取で居るのう、どれ〜一寸  
 尻尻身舞にゆううと雪隠の前へ行 下太郎「ナイ茶め將軍和睦が調ったから城を出なせへ。  
 此せまい處へ糞の如く鎖籠て居たら劔戟も置ず。とがへしも無ッて無不自由だらうと  
 言つ、わけんとすれを推へて居るゆゑ 下太郎「コレサ城門を開たまへ 茶め「何様して此處を  
 出られるものか自己をおびき出し相手方へ渡さうと言たッて左様いいかねへ 下太郎「其  
 様を裏切をするものか和睦が調ったから開城しろと云のだ 茶め「眞正か 下太郎「兎も角も大  
 手の木戸をば明いへ 茶め「夫だから出るのいいやだ 下太郎「其様に出たくなけりア遁入て  
 居さッし 茶め「と言れると出城し度なると言ながら雪隠の戸を明て顔を出しバア」自  
 己の追蒐て來るだらうと眞に（唄）氣を紅葉笠彼松安くと濟ふとい。夢白むりの。と

のどにくろろ懸笠と。おい／＼笠の末かけて。氣を付笠と言ながら座敷の方へ行  
 ろりやア宜が茶め公。お前の引摺倒した男の無言で居ちやア能ねへからいつて来ねへ  
 喜次「エ、なに夫ぢやア彼の源兵衛さんの足をやらうしたのか。左様サ少しの事  
 辨慶さんだと強いけれど。う。何様してもいかれねへ。一介故／＼。一夫だつて  
 敵の城地へ踏こんで萬一和議の破れた日。やア帷幕の内から伏勢が起り、或ひは城門  
 の外に落とし穴があつたりしてみなせへ。阿修羅王へ獅子ふんぢんの爪を寄せて悪氣羅刹  
 へ三面六匹の鬼神としんよふよ懸たつて敵の大勢味方の一人。たのむお前ハ二心ど  
 のだもの。防禦の手術があるめへぢやアぬへか。野良。一なにサ／＼敵城へ踏こんで事破  
 る、に及んだら兼てハ腰に用意の山ハ。煙草の煙を上るが宜。夫を相闘よ味方の勢。貴  
 おどしよるひと取て肩にかけ。負の鉄形の前立もの打たる兎を猪首にさなす。困せ  
 丸と號けたる難波代の太刀を横たへ。借金。の利足高の羽剣たる言延三年竹の征免を無  
 理に負なし。借用詩文の加印五人張の弦弓を欲の丸の懸摺と握り。家の前の瘦犬鹿毛

へぼんくら置て打乗。うそ八百人を前後左右に引きたがへ。案内知つたる路次の細道。  
 敷連たる溝板を。勇みにいさんで踏踏かし。大手の門の格子ささ雨たれ落の堀際まで  
 ヒシ／＼と推寄たり。ト万歳扇をひろひ取火鉢のふちをた、さゝる。折から表が瓦落  
 ト明く故「サア／＼お肴のお客さまがお出なすつた。茶。お肴のほ客様が出。誰れだ  
 野良「飛八か跋助のうちサ。茶。左様かそんなら一番驚かしてやるべし」と言つ、立  
 て這入口の障子の蔭よ。かくれてゐるとい知らず彼家主の源兵衛ハ此表と通りしが下  
 太郎が扇を以てた、さ立るを講談かえじまりたると思ひ大の講談好ゆゑ案内もなく  
 上り来り「イヤほめんなさいト障子をわけ顔を見て喜次郎はじり皆々飛八か跋助と  
 思ひの外茶めぐ事にて来りしならんとハツとして。喜次「これハ源兵衛さんサア／＼此  
 方へと言ながら。蔭に隠れて居る茶め吉に目ませ。以て知らすれば。飛八か跋助の事  
 を謀つて源兵衛さんと言ちらんと思へ。少しも構わす。彼源兵衛が敷居をまたぎ。は  
 いらんとするろのこたんに「ワァーッと言つ、妙な手をして飛いつれば。源兵衛ハ不

意を打れて肝を潰し源「エ、常談をど後へ下る顔を見て、茶の吉も仰天し突出たる手を。上たり下たり又振廻したり「ワァーわあ〜わ、わんわん〜」と犬の吠る真似をしながら亦も雪隠へ逃込たり源兵衛は是を見て。あッけにとられて立て居る。四人の者も吹だす斗りよ川笑の可笑さまツかり奥歯でかみしめまばらくいッと言て居たりしが喜次郎の漸々笑ひを飲こんで「イヤ是は恐入た今の男がお前さんとい知らず政介といふ朋友だと思ッてどんだ鹿相と免なすッて下せ〜と言を聞て苦わらひ「ハ、ア夫での其跋助さんの爲にの私が次信で君のは馬の矢表へ駒をかけよせ立ふさがり。虚名「是の茶め吉がなんぼ平氣でも少々なり経であつたらう。何かどんだ権浦でお氣の毒さまで座ひます。夫は宜がお講釋が利まけて居たは様子故私もは聞やさうと存じて上ッたのだからサアお構ひなく。おやりなすッて下せ〜」ハアイ講釋とお聞なさるのには尤もだが。左様で座ひやせん」あの茶の吉をお前さんの處へ倍禮につれて。出様とぞんじて其ことと咄して居た所。スルト茶め吉の倍禮に參ッ

ても堪忍して下されね〜日にの大變だとすすと此下太郎が「ッウ〜うをとい且す八百本のあやまり證文を青柳橋の朝嵐にひるがへし。貧の餅形のおろか家の前の瘦犬をかげまに賣ても。自己が中へといッて倍禮してやるからと。そめて居た處では座ひます。ハ、ア夫での仲人にいらうといふは相談かへ。何様いふ理屈か知らないが町内うちのことならば及ずながら私も口をそへて上ませうか。喜次「なに貴君へ倍禮よつれて參らうと言のでは座ひます。ハ、アお長屋の行専の今月のお前さんか。ヤレヤレは苦勞千ばんな。喜次「なにサ先刻湯の中でお前さんに失禮と致したの今亦人遣で驚かした男では座ひますから其人物を倍禮に。ハ、ア成程イヤ夫ならば別段は挨拶にいかよびやさぬ」此源兵衛も心よしと見へて何事も氣留め様子を。茶め吉の雪隠の中よて窺ひすまし。六づか敷きことも有まじと高をく〜ッて。のそ〜出来り源兵衛が前にもぢ〜とかしこまり「是は家主さま先達での洗湯では失禮仕まつりました。あの彫物だらけな野郎が餘り。りさ〜やアがるから。すばらしひめに合してやら

うとぞんじた處が。お前さんの足をつらまへて引張やした。全体お前さんの足は大造な毛で座ります。あの様子を唐煎をいくらあがっても。お氣づかひの座いません何卒失禮の處の眞平は発なすつて下さる様願ひます。源「イヤサは挨拶で痛入。サア」  
 「お構ひなく隠へおえいりなすつてお出ささい。左様なら喜次さん大さにお邪魔をした。何方も澤山お咄しなさいと言きから表へ出て行。茶べらばうに氣の宜家主でねへか。喜次「ア、見てもなか」の通人サ「道理で足よいかい事罷が生へ居たッけ。夫の宜が彼處の角の廣蓋の肴の何様ぞたのだ自己の左様思つて居るせ。出す物なら早く出して仕舞の宜冷く成わ。出す物だか。ひつこす物だか譯らねへのだ。野良「さうの事お施主に構はず。鍋炒喰れんげきやう。中の汁がだぶだぶ」とお纏とあげて仕舞やアねへか。下太「左様サ夫でねへど五人の亡者がうかび兼る」と言つ、廣蓋と持出さんとする其折から。表の方より大聲わけ。此上酒のお入イーてんつくつくてんつく」と言乍ら跋助。飛八片手に壹升樽。片手の突袖しながら何か体をぎ

く去やくと去やツちこ張て。入來る様子。趣向ありげに見へければ。喜次郎始め四人の者、顔を允合せてためらひ居るうち跋助。飛八の持たる酒樽と其處へ差置。是の誠よ。お鹿酒玉の印しまでに差上ま。喜「是の雖有ぞんじます。左様して何かいかめしき内容子なれど口上の夫でお仕舞に座りますか。はね「左様で座ります。モ、ハヤ皆よ相成ました。イヤあ喜次郎の先刻鳥渡やへ付山海の珍味を差上たるを。定て參つて座らうな。喜次「如何も先刻參つたれど。是なる四人の者どもが。ことごとく喰て。入物計りの残り置ました。エ、はね「しげねせへくひとことをさやアがひた」と立にか、れバ喜次郎が「と言て驚ろした迄のこと。サア、廣蓋を出たりく。虚「ラッと承知。茶。進べなア。八里ハ馬アでも越がなア。エ、とッこい重いぞく。エ、ろれ傾て持と駈れるわ」と是より七人うちまとの差つおさへつ。飲ほは酒宴益々盛んにして。いつはつべきとも見へざりける。はね「時に明後日の初卯といふのだから連中一向押出ちやアどうだらう。一宜かるべし」だ。何か面白い趣向が。チャット思



○七偏人

初編卷之下

○五十七



げふ酒の  
うわの  
はひの  
はひの  
はひの  
はひの  
はひの  
はひの  
はひの  
はひの

○七偏人

初編卷之下

○五十六



ひ出した。あの池の端の和次さんの連中を見た様な事をヤツて見てへのだ。一人をうつがうと云の歎。下太「かつぐのならはい駕籠連中だらう。茶の「無言で居ろへ。」「茶番と言奴で行の。」「野長「左様サ其茶番サ。」「夫なら極面白筋があるぜ先彼様いふ趣向ヨ。一寸聞ねへ。ホイ紙數がたりねへ。嗚呼おしいけれど仕方がねへなア」

編者曰サテこれから彼の妙義参りと龜戸の天満宮の話を以て臨み七偏連中一同より(愈何所彼所に於て一世一代の大茶番を興行仕まつる間は勝手次第は見物下さるべくし)ト云ふ廣告めきたる引札と江戸中へ散したるより老若男女の大群集其實地の可笑味の第貳編よて諸君宜しくは覽を乞ふ

妙竹林話 七偏人二編之序

似て非なり桐に鶏鳥竹に猫と。例の差恋なき緋嫺の狂句に洒落た口號に。聊か因る竹林翁。豹脚を相手に醉語を巻。七賢人に似て非なる妙竹林話の七變人。數も七色唐むらじ。胡麻粉芥子粉山椒の粉。甘と辛。茨春ませて爰に著述せし金鷄子の。滑稽笑話を一回開は。堅向老爺の固藏も。おもひす腮の掛輪を脱して御臍に茶を濁し。怒氣顔の癖窟野良も。ふうくふツと吹出して笑ふ門松福の内の鬼討豆で無事息才。笑の内病發表して即坐に平扶良劑寄樂。又と世界に人の穴妙に穿て御せいやすと。僕も側から褒賞し愚文かむらも

三番叟。とツはひやると鴉飛。東天江と告渡る時代夜明の宮神樂。初卯參詣の戻り路。一寸一幕立茶番。立廻りさへ太鼓はらの音にかよひたる天神橋。人の巴に挑あふ下にそはやを連中が音曲入の一趣向。鳴響まで御最負の船が中ると聽さへも。幸ひよと似て非かる叙らしきものを有ツ丈。智慧を振くも猫糞で。筆に頭顱を撞の如し。

清江舎 秋水誌

妙竹 七偏人二編卷之上

東都

梅亭金齋詞火

然らば七人の野良くら者。酔の廻るに隨つて彌々道化に枝葉をうへ。今年の春の初催はし恵方がてらの初卯まで。往んば成まいと思ひついたり。末治の趣向に。喜次郎鼻どうごめかし。諸自己が年來監へて置た茶番の筋と言ひ。茶一サツと待たり此方の其年來の頭へ数の字残とまらせて。數年來仕組でいた趣向と言ひ。言のが自から年來の次へ廻し。位のつひた年來から先へ本讀にかゝらふ。喜次。併數と言冠り付なら申し上てもお取用ゐに。なるめへ。都てすの字の付たものに。ろくな者いねへ。すじたん。素股。すぼける。素かしばサ。茶。いやサすか。五鹿だか。階子鹿だか。喰ねへで。尋るものか。エヘン先づ。下太。一ハツと其先といふの。美味くねへと云。發踏のことばか。茶。エ、だまれく。オカン情。野良。アハ、先でなけなしのは。奇ッばしらを捻られたもんだから情。といふ。初聲。發したの。喜次。一どづかに。本讀のすむ迄。常人の外口と聞こなしに。





茶「夫がい、其處で當日ハ一葉浮べ朝やたさより掉さして。堅川通り天神橋から上船で妙義の社は申すに及ばず天満大自在天印の瑞籬にぬかづき茶番長久滑稽はんじやう。並に女難除の祈と下太エ、其様なむだ口ね叩かねへで早く本讀にか、ねへと喚でやらねへぞ。譯らねへチイ、だぞ料理残出せをどって。膳立からまなけりやアならず。一寸また文章残かくよも枕言葉といふがあるハサ、一足下のすかし尻唄ひのハ屋守さんも存だハ。一夫から何いふ筋又成の茶彌々人の出盛ッて来る沙ざさを見定め。下太ハ一沙魚か鱈でも釣るやうだの茶。夫から沙魚哉。エ、ヒレッてへ。はたから口残出すので釣込れてならねへ。其處で押上げ通りを中ごろまで戻り自己が田甫のほうの空を詠め。イヤア、われ、何だかそれ。ト言と喜次さんも空飛みてほんに何だか降て来たと言ので往來のものも何が降るのかと思ひ。立どいままッて空を見るハ必定なり。ろこで虚呂松先生疎大將ハ一二町もはなれ。同じく空を詠めてアレ、何か降て来、往來の人とたぶらかすサ。夫から亦二三町斗りも

はなれて下太の君と飛將軍が。其傳をやらかすのヨ。右ニ付土手中首仰びひて空を見るやうよなるせ其處で野良大人ハ一人川向ふの土手の上よ居て是を同じく何か拾ふ身振残して書た散し残三つに折て申へたさみ妙義さまから出るお札の様よこしらへて。田のふち枯草の中へ落してあるかふと言のだ。夫と見ると往來の人達我も我もど拾ひに来るわサ。するとわッちこッち其地此地に落てゐるもんだから。是ハ不思議なんであらふと取上げてひらひて見れば

口演

今夕吾妻の森におゐて七偏連中打より一世一代の大茶番興行  
仕候御勝手次第御見物可被下候

妙竹林

七人男一同

正月九日

大江戸御町中様



〇七偏八

二編卷之上

〇九



〇七偏八

二編卷之上

〇八

うぢの  
宗匠の  
新編の  
中巻の  
増巻の  
おまけの  
おまけの  
おまけの  
おまけの  
おまけの

と書た散しだらう。喜次「なる程左様来る日よやア拾ッて土手拔埋めるから本所のさ  
て置兩國迄も時の間よ廣まるだらう野良夫れにもう左様なると火消も手抜引て見物  
えてゐるからの。」「まかし川飛で来られた日よやア茶番處か大變たらふ。」「エ、  
く、邂逅口とた、くと直な事アごた付やアがらねへ。」「茶め公其後どうだ、く、茶、そ  
こで大釜一枚一つくめんして程よき處へ居て湯を沸し。五六もんめの茶成二三斤も  
。さらけ込先にはなをこしらへるのだ。ろこで一さわ高い足駄とはき。其上から大夜着  
を着て身の丈八九尺ぐらゐのやうに見へる張ぬきの大頭をかぶッて、彼つくしにおび  
いたる數万人の見物がおしかけて来る處。心得たりと大釜の茶成茶碗へくんで持て  
出。一則吾妻の森の大茶出で御坐。」「サ、ッ、」始終其様な事だらうと思ッた。夫だ  
から數の字の付たのは言なさんと言たのだア、。下太「涙ぐんで居やアがるせ。茶め、  
子女死んで吳國はるび。范蠡さッて越衰ふ。是程のことを監へても。もちゐられねへ日  
にやア卍和が玉だ。孔子の聖なるも時にあらず。」「サア、く喜次さんお前の番だ。早

く本讀とはじめねへか。下太「イッ、一思ひに聞て仕舞ふ。喜次「先自己の筋と言のは  
一人が諸國武者修行の拵へといふので。黒羽重の紋付。無地博多の小袴。紫ちりめん  
の上帯に。張物作りの兩刀。頭ハ中五分の草たばね。其處で紫の福紗包に木太刀を  
く、り付て。脇の下から肩の處へはすかけと言奴だから丸で成駒やの宮木武藏とい  
ふ拵へた。借自己の形ち。鼠木綿に鼠の頭巾。鼠の脚半ちん、くばまより。勿論。鼠  
の紙布。首にハ頭陀袋。絨うけ。如意とかいふ物代を襟へ挟むといふのだから。男の宜  
女惚のする宗祇。芭蕉。と言拵へ。尤も哥修行の行脚と見せる積りのだ。」「如意袋さし  
て行脚と見せるよりハ。撞木をもッて磐若と見せるやうが能似合せ。」「エ、だまれ。  
其處で今一人ハ仇ッばい中年増といふのだから。古人坂東秋香の役廻りだ。そこで武  
者修行ハ法恩寺をまつすぐ、鎌井戸のはらへ来る。自己ハ劍の哥修行で鎌井戸から法  
恩寺のはらへ行道。天神橋の上で行合手等よして行違ひながら自己ハ武者修行をじ  
ろく、見てハ劍術のこひて薙手の習ッても十文字さへ習ぬかあし。」「言古人の狂哥





と口づかむと武者修行の聞とがめ「今吟じたる狂哥の拙者裁めざける一言ろのま、  
 より通さぬと紙布の袂をきっかり取「いや静かによすがい、もし縫ひが切れると  
 損料計りで済ねへから 下太「だまれく「これの近頃迷惑千萬いかで貴殿の事を申  
 さん。古人の狂哥の浮びしま、に思つづ知らず詠せしのみ。ろこ放して通したまへど  
 いふと「比興なりをくしたか人に難言い、かけて。逃るとてにがろふか。と言つ、後  
 へ引かへす「ろの手裁取て突放せば二足三足たぢくど。よろける足裁踏まめて「ヤ  
 ア小ざかしい賣僧の腕立。くわんねんしろと云ひあがら脊中の木刀抜取て。真向みぢ  
 んど打てか、ると襟にさしたる如意と持。右手はッしと詰どめると言。此處からの武  
 藏と笠原が鎧蓋の立でいかふと言のだ。其處で二人が宜加減にたつさ。左右へはッ  
 と身裁開く處へ例の女形が「マアく待てお二人さんと聲かけながら中へわつて入  
 〇ドールト踏止た足踏を相圖に兼て橋下へ付ておく船の中で「コチイちゃんくと三  
 味づる裁切かけに三人のお前女でおいせさんと三國けんになり。めッちや踊りと變

として船の中へ所作りこむと。直に三味せんい佃と替り吹よ川風上れよ雁チヤン。ス  
 ナヤラカチヤンくで堅川通りへこぞ戻ろふと言趣向だが「さうだく「いつも  
 の不手際にきてい出かしたく「野良で「出かしたくでい可笑くねへ喜次郎さんの頭が大  
 きひからでこしたと言てへ「茶「夫ぢやア役割と極ずば成めへ「喜「夫ぢやア斯しやうか  
 前の仕組だ狂言を取ねへ代に武者修行と言役裁やるがい、〇彼なら随分請取せ。左  
 様すると亦皆が種々なこと裁言からいやだ「喜「何の誰が何と言ものかのう庶呂公「  
 ろれい下太えうだつて跋公だつて承知するだらうス「野良「全体武者修行の役の茶め公  
 一本鎗だもの。誰がきんと言ものか「喜「三階一同の見立だから其意に解ふがい、お  
 やアねへか「茶「其様な事裁言たつていざと言と。面のさんどふが出るから「喜「白己が  
 請合よ「茶「彌か「いよく「だよ「茶「先斯念裁推て置てエハンうふん東西く「情此度妙  
 義まふで茶番武者修行宮本武藏相勤まする役人色師の茶め吉。尤も當人役不足には  
 御坐るますれど。連中一同の頼みに付もだしがたく「ハ、アかつらやつて出と扱た

赤。胸に女形といふ奴だがこいつア争ひのねへ様に聞にまやう前でも長いのを取た  
 のがお山茂やるのだせ。と喜次郎が聞取こしらへ差出せを皆引に。虚呂松ながい  
 のに當りければ、跋介野良七飛八下太郎の西人のもの、不性ぶしやうに、唄ひ者。三  
 味線。亦後見と役割とさめ。再々「サア、くすッぱり揃ッたのさあ、く、稽古に取るか、ら  
 う。茶、チット、承知之助と立赤が飛八が焼てゐる切餅と一寸撮んで頬ぱり、ア、らめ  
 へ、くろりやア宜が喜次さん何か持すばいけめへ。チット、奇妙サア此まんぱり捧だ  
 お前何ともし。再々「自己の孫の手だ。下太「サア待ッしア、能喉うらしたまア。丸で安  
 達が原だせ。野良も餅にばかりに懸ッて居ねへで此處らの物茂はこぼッし。ど皿  
 小鉢我勝手の方へ推うたづけ。野「サア、舞臺が出来た。茶「ありがてへ。再々「自己  
 が狂歌をよむお前が聞とがめ逃るとして逃さふうと。自己が袂茂しッくり取エ、無  
 言で取ちやアいかねへと言に。何だア赤川怪な目つきをとして。茶「エ、げッ、お前  
 が餘り急込うら。餅我鳥飲にして仕舞た。マ、くるしい。よし、かキア。逃るとして

逃さふかと袂を搦。「お手を取て突戻す。茶「たぢ、く、く、三足さがッて。イヤッ  
 こいと踏とめる。喜「ヨーしろこで脊中の木太刀を取て打込。茶「ヤアからか。ア、いた  
 く。此東埔塗ア何依人の頭と打ッた。茶「ハ、アお蔭で頼の出子ぐへこんたらふ。喜「ろ  
 りやア宜が孫の手とどこうへ無した。下太「お前腰にさしてゐるぢやアねへか。再々「違へ  
 ねへッラ打込うら詰るくるりと廻ッて。茶「この處で。どんどを突て身の輕い  
 處をうらやッて。イヤッてへ。うらそこでさわだ。茶「ハッ、と承知と兩脚を前へ投出  
 し屁へにとッさり居りながら。片手を壁へ突はづみに火鉢にうけたるあみのふちを  
 蹴飛ばせば。焼かけたる切餅はぱらりと四方へ飛散て。茶「め吉が襟の中へ飛こめば。茶「  
 ア、どあわてて跋おき。ア、餅の中へ襟があ、つ、く、く、と首を前へ突出す。焼餅の  
 ずる、く、と下の方へ落るゆる、あ、つ、く、く。下太「なに餅の中へ襟がはいつ、どれ、く  
 「是れか。これかと着もの、上から押へ付れば。茶「ア、上から押られてたまものか。  
 をッ、と承知隠がさへ當りが付、い、。と餅と間違へてふん、どしの結び玉と。股引くる

とぐつと引ば餅の帯の間をくぐつて。尻の處へまたするくく。茶め「ア、こりや何様よる尻が餅へはいった。あつくく」と飛上る拍子しに疊に落ちてゐる餅を踏つけ。あつといくく」と後へどつさり尻をつくと股引の間へ落込だ餅を尻よて平潰し。ア、こりや此奴等ア、つくくく。アハ、ハ、ハ、ハ、茶め公立引があるから其處で一番尻をひつてくれ。すると餅責尻せめいといねと。といふまやれが出るから飛ハ「エ、あわれむべし」と喜次「やれくあわれにも。ふみつけたあまぎまをみる」足袋をぬがなけりやア此難のあうった（浄瑠璃堀川）足袋どくく。のは。よは。よは。よは。よろく焼餅また踏ら。わいいな「エ、此様も尻へひつついて仕舞たア、いたく毛がまりく言のと。ひとりもぢく尻へついた餅をへがしあから。股引の前のごとから振ひ出せば飛ハ「そりやころ御安産だ」喜「やれくお目出たい」と連中一同大笑ひ。夫より稽古もあらずすんで猶當日の評定よ。各々餘念のなうりける

妙竹七偏人卷之二編卷之中

東都

梅亭金齋編次

斯ていよく初卯の日と成ければ。龜井戸ある妙義の社へ参詣せんと七人の連中。兼て工みし茶番の趣回。河岸の柳屋よりして小氣てんの刺た。若者をやどひ。兩國川を横切て堅川通りをこぎのぼるに。七人の用意の酒と飲はじめ酔の廻るに。隨つて又一倍の勢ひ付。此り、しほ持ちらへと船の積込にして置のは土中の玉で惜しいから。自己ア岡を行せ。虚言、一やんに私さも少行方がい、のだよ。全体船の血道にさわつて寸白に悪いのだから嫌ひサ。もし舟頭はん誠にお氣の毒さまで有ますけれど其處らの棧橋へ一寸と付ておくんあはいよ。あの後生になるんで有ますから。だまれくこりやく舟頭。彼様な持のならぬ女郎があつて。こ、より上船致す。ナ、同船の方く御縁つさずば。重て御目にかゝるべし。下太、一兩人共ちと取逆上て居る様子だ。一其處かの河岸から追取して見やう。おやねへか。喜「だが虚言公の頭がかつらだ



〇七偏人

二編卷之中

〇廿一

扇形内的文字：  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの  
あつたよりの



〇七偏人

二編卷之中

〇廿

からむさだしぢノあるけめへせ。私さも左様思へから頭巾と持て来たんで有ますよ。だが染がかわ色だから氣に入らないので有ますのサ。野良、だけれども鶯色でねへから宜い。鶯色だと皿の染と一つだから。前だか後だか向わからずで後見がまをくするハ。虚言、サア、女形の方の頭巾をかぶつたら。胸へ上ッて仕舞ひさし其處でお武家様だが。茶、身どもなら草鞋とはいて居るわい。下太、まア棧敷で山寄せへ大小は日己が取てやるから。茶、身ども、速やかに上陸致さふと仕するが。ひびりがされて動かれもうさぬ。飛、サア大丈夫だから上ん寄せへ。下太、そら大小だ。茶、ヨットよし。喜次、エ、夫で右だわ。茶、ヨット彼様して左り捻りよ貫木さしか。野良、ちりの大小なら。柄や鞆に瓜の種がまじッて居ねへか。野良、やれ、穢ねへ糞持たぞ。野良、あの馬鹿をひなせへ。首をふつたり捻つたりして水鏡だわ。下太、ア、夫を取と坊主になるぞ。喜次、船頭さん追上ッたら早く船を出して呉んな。野良、アレサ待てお呉んな。はいよう。エ、モじれッてへ。夫ぢやア後刻にきッてさますよう。夫ぢやア後見を

ツかりたのんだぜ。兩人、ヨット承知。といふ内船の間ひ遠くぞなりにける。茶、身どもは是より本街道をサア、家來ども参りますべし。下太、御たいそうな事を吠やアがるせ。下太、イヤそりア宜が足下いどツちの東埔差よ付積りだ。自己の両方とも御免だ。下太、んならからしやう。拳を打てまけた方が女に付としやう。下太、貸た方が宜のか勝た方が宜のか。下太、なにサ宜悪いに構はず左様しねへど。果しが譯らねへから。下太、そんなら仕方がねへ本拳か狐か。下太、ちと流行にのをくれたが藤八で参るべし。下太、ナ、藤八なら蟻螂が参たサアこい。下太、イヤよ、ハ、是ハ相公ハッて最初おさげなす。下太、藤八ついでア、こりやア終ねへ。下太、あんた、糞を踏たア。下太、どれ、人糞か。下太、犬糞か。下太、本蒲色だから先の人糞の方だ。下太、なんの人糞なら側に紙が落てる。下太、右へも左へも捻れて居ねへが人にしろ犬にしろ余程出来の宜崩座と見へる。下太、此足の何様しやう。下太、章魚なら一本切て捨ても宜けれ。下太、ア、段、臭くさるせ。下太、びッぶ、早くこの上り場で洗ひませへ。下太、女難の勿論もろ

くの難をのがさしめたまへど。新て置のだが糞難の氣が付れあかつた。川の端の段と下り。足を洗って居るうち、虚呂松は割下水通り。茶め吉の法恩寺橋通りの方へ至るに。後の方から大奴が朱鞘の大小を貫木さしに横たへ。大綱の馬乗袴をはき。ゆき短き紋付の着物を着したるが。召連たる下部に何かひろく私路と。下部は少し足を早め茶め吉に追付て腰をかぐめ。僕「モンキ些ものべい御聞やしたうござりやす。龜井戸の天神さめへ参るよ。此道サア行やしてよう御坐りやせうか。と聞れて茶め吉の打合点「在下も未當地の不案内なれど。軍法剣者の奸術をもつて飛行自在に往來するゆへ。モン龜井戸へゆき度ば我にしたがひ來られよ。」ろんたらハア貴君さまも。お江戸で御坐りましねへのかね。左様。在下の因州取鳥の浪人平井權八の御坐らぬ。肥後の國熊毛の産物六三本宮四と申すもの。一夫での兵法御修行にお出さされたので御坐るやすかと問れて茶め吉の能物生捕たりと心に喜び「エヘン其許の愚案の通り。稚き頃より剣法をこのみ始めて桃園に藝をむすんで。早く黄巾の賊を平

げんと彦山權現に祈願をかけ。一日千人の力をさづかり故郷毛谷村にかへらんと。甲州の猿橋を通りしにはからずも黄石公に出會。皆づる姫が手引をもつて六騎三零八陣虎の巻の兵書と探り。引かへして鞍馬山に馳登り。亦僧正が谷へ往に前後左右に冀でいさい雲霞の如く。凡ろ六人程の天狗ばらが列と正し。最とも夫が中に頭だちたる大天狗が。我をさると何方へか行んとするゆゑ我早くそばへより「ヤマ逃るとて迷そふかと紙布の袂をまツかり取。其手を拂つて突もどすと。二足三足たぢく」と。よろめきたりしがまツかど踏しめ「ヤマちよございな賣僧の腕立くわん念しると言ながら。脊中の木刀のまんばり棒を抜取。打てかゝると彼方にも如意の孫の手を持ち。はッしと請る。又打込とト、ンとんくんと身をひさり。天狗どもに身の軽い處とみせてやらうと思つて。ドーンとさばを突と忍地襟の中へ焼餅といふ物が飛込で。脊中のさながら火を脊負たるがごとく成故。兼て聞天狗道よハ一日に五度の大魚熱のくるしめと請ると聞たれば。我も魔追に落たるかと心付より脊中とくゞり。焼餅を股引の

股の穴より振ひ出し。水の印を結び湯風呂の羽目を打くたき。白くら一家の奴等をして  
 ろし暫時浮世を忍ばんと。身を山伏の姿にかへ安高の關とらち越て。栗生、藤原、烟。  
 色利の四天王もろとも大江山なる千丈が嶽へおしよせ。酒吞童子を取ひしき富士  
 浅間の神を拜し。彼人穴を立出て狩場の暗のくらまされ。敵祐經が陳所をたづね。は  
 からずも九紋龍史進に出わひ。姉宮城野の白柄の長刀。在下へくさり鎌の奥義とまひ  
 め。名と辨慶と改めて五條の橋に寝てゐる處を。蜂須賀小六に足を踏れハツと思つて  
 目をさますと。後の方に立たる八百屋のお七。不儀の御家の御法度と。思へど軍師孔  
 明がすゝめにまかせ。鷲坂内等を打こらし。彼が古郷なる山崎村の與市兵衛が方へ  
 至る。折しも後醍醐天皇の笠置の山へ籠らせ給ひ。楠正成にも参られよとの詔のり  
 取物も取わへず遊君阿古屋を引出し。色にいなまじ連は邪摩。一人先懸け高名せん  
 とかなざい棒と協ばさみ。御所のろろ門おし破り。梁山白のふもどなる新の口村にぞ  
 付にける。一なる程仰山なむ稽古で御座りやすなア。茶。イヤもろ難行修行に衆生とら

度して學んだだけよ。牛馬唐犬のもどより。哥舞妓十八番の武藝ことごとく秘肉を  
 極め。且陰陽和合の法に通じ。春三夏六秋五無冬の道の。理をのちらめすと言事なし  
 我當地に下りて先一刀流。心かげ流。柳剛流。無念流。明知流。柳外流。眞形刀流。鞍馬  
 流。音羽屋流。大和屋流。成駒屋流。高島屋流。ないし竹本鶴賀流。芳村孝次流。杵屋六  
 四流。常盤津富本清元流。都々一とツちり葉唄流。ちよぼくれ流。ちよんがれ流。ちやら  
 まか流。のんこの酒蛙流。喬麥屋の風鈴流。親爺爺客流。吉原どめらの目覺し流。老手老  
 べんたらたてゝ連流。さど、諸藝の先生達と試合を致すとらへども無へ山風の嵐をも  
 ッて奈良の都の八重櫻と吹なびりすが如くにて。更に齒に立者一人もあらず。其許に  
 も道場らしきもの見給はずや。言ながら北風の寒ををこらへ。腰なる鐵扇拔取てを  
 さくくくと打めふぐ。一夫たらハア申しませうが拙者主人の。事の外劍術志らしん  
 で道サア聞ふりをして御容子のらお尋ね申して参れよと申付ました。茶。エいなんの事  
 だ面白からねへ。惡ひ晒波だ。ろしてお前もどらけつたらうと。うそ氣味沁く成故足





と早めて逃支度する後から「イヤもし一寸御意得たひ。御修行人」と呼とめられ  
 て。吃ッとしながら後の方を見かへると。雲つく斗りの鉢鬘奴が二王立つ、立て  
 武士「是ハ御修行人初めて御意得る身共ハ摩伽盤若破羅密多流の元祖醫藥切二八  
 の門人土手焼國者と申す。其許の御姓名ハと問かけられて茶め吉「ハイ、ハイ、ハイ、  
 私ハ茶め吉と申上りますが。ちと急ぎなすから。ハイ、ハイ、ハイ、不機に御座り申  
 すれど。御先へ御免を差上たう。ハイ、ハイ、存じます。ハイ、ハイ、御姓名ハ六三本宮四と  
 お、せられたでハ御坐らねハか」ハイ、ハイ、左様ななを通り六三本宮四藤原の茶  
 め吉と申します。國音「ハイ、ハイ、ア夫でハ茶め吉と申ハ御實名で御座るな。茶、ハイ、ハイ、至く戒  
 名に相違御坐いません。何方の御門弟でハ坐。茶、ハイ、ハイ、師匠ハ清元延みつと名  
 びろめと致しました。が。ちと取急ぎも申すから。國「お流儀ハ茶、ハイ、ハイ、神免二刀流  
 の三味線を少々かぢります。一なにお流儀ハ三弦と御用ハがめると。なア程孔明  
 琴と弾じて魏の勢ひをはらせせ。國「中ハ柔らかなと取る、流法かんじ入てハ坐る。

と言内彼方よりがんぎやう作りの武士八九人打揃ハ。大手を振て大道せましと出来  
 りしが。國音と見て「是ハ、ハイ、ハイ、十手焼先生何れへ御出。今日ハ亮齋此四郎殿の稽古  
 始め故參らんと存する處。一よき折から各方にお目に、ツた。是なる御修行人の神  
 免二刀流の先生。清元延光殿御門人六三本宮四藤原の茶め吉とお、せらる、無雙の  
 劍客知己になられて宜敷御坐る。茶、ハイ、ハイ、御高名ハ未だ承たまはりませぬ  
 が始て御意得ます。拙者ハ典法百之壺と申す者自今お目しり置れて。茶、ハイ、ハイ、  
 「拙者は此卯三郎己來御心安。茶、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、  
 御こんいに茶、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、  
 内冢尾「小生の犬居灣助。又、一統連立し者ハ皆我々の朋友よして。奥羽九州ハ  
 申す。及ばず諸國偏歴致して今日修業最中相手もがなと望む處。など、と一人、  
 に名乗かけられ茶め吉は只「ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、ハイ、  
 人を拙者道場へおつれ申して一本づ、願をふでハ坐らねハか」ハイ、ハイ、夫が宜敷

は坐らう。然らば宮四の拙者宅の此先イザ御案内を致とでは坐らうとす、め立られ茶め吉の酔さへ醒て忙然たり

妙竹 林話 七偏人二編卷之下

東都

梅亭余蔭編次

さて藤原の茶め吉の七八人の武士に前後左右を打かこまれ息さへ支へて出来ぬ心地に是非も茶の葉へ振塵のまほくとして藤井戸の方へ一二町行とある冠木門の内へ無理無たいに引込れ「へい」く「些お先を御急ぎで御坐いますから」イ「エ」く左様な御心酌なく。まづ「われ」へ「何ぞお急ぎなさるの」私し「お上りなされぬか」へい「是の情ない左様なら御免」ヤアなんせ草鞋サアおぬぎなさらねへで「立脚」へお踏込なさる「へい」く「お御免下さい」へい「と周章ふためき草鞋とぬぎ捨。又式置へ上りかけると「これ」く「お刀サア差たる儘にてお上りなされてハ失禮で御坐らう」へい「何様も誠になれませぬことゆゑ。何事も取違ひまじと。へい」くと大小取て草鞋と一所に土間へ差置。此上御失禮かござつたら。もうツと小聲で御願ひ申します。其様にお阿りなされると肝よこたへて成ませんへい」くと

震へく式臺へ上りながら。劍術者の家にての道入口の兩方に待伏して不意に粗付  
 など、言ふことを。豫て聞かぢりぬる故。もしや左様かときよとく。志ながら敷居へ  
 足を踏かけ。玄關へ上らんとすると脊中よ脊負たる木太刀の先が。かものへ突か、り  
 後の方へ仰向し轉りおち。さての上から手を出して抛られたるかど肝を潰し。ア、い  
 たくく。悪い御常談を。ア、いたくく。と小言だらく。起にか、れど。脊中に縛  
 せし木刃が支へて五体の自由にならず轉りく。として居るを。ぐづりく。と笑ひな  
 がら團吾の手を取引おこせば。茶め吉の煎をしかめて立上り。是の先生ア、いたい  
 く。痛いお世話に成ましたと言時隣の下屋敷で。づど。ア、んと放す大筒にエ、  
 、と胸り又尻餅をベツたり突。ア、いたくくく。それはさて説下太郎殿介  
 の兩人の虚呂松と茶め吉と見うしなひ。其行方を知らざれば下太郎の虚呂松を尋ね。  
 殿介の茶め吉と尋ね。法恩寺橋通りへ出来りひかうよりくる人よ。武者修行ていの者  
 を見かけざるやと問ふに。ろの人の今大勢の武士が彼處の冠木門の内へ運込たり

と聞、ア、イヤろいつア臭ひ咄したと故へられし門へ行き中と覗いて見ると。果して傍  
 らの土間に朱鞘の大小が草鞋と一處にかゝめて有故。さてころど心に點頭人の居  
 るを幸ひに。こわく門の内へ這入玄關へ行て見るに。茶め吉の茶煙草盆とひかへ。  
 へんな顔として居るゆゑ。殿助の小さな聲をして「ア、宮本氏ア、武藏先生とい  
 われて。茶へへへくく。此處だよへへくく。ア、奥の方を見て拜禮斗りして居や  
 アがる。ア、此處だよ。なんだ殿公か。有がてへく。と四邊さよろく。拔足をして式  
 臺へ下り來り。自己ア此處にやア居られぬへ。と言より早く飛出せば殿介も何處とな  
 く底氣味わるく。草鞋と大小引渡ひ一生懸命にかけ出す。茶め吉のこけつまろびつ四  
 五町程走り。寺の地内へ驅込ひゆる殿助も亦つひひて驅込「ア、せつねへ。自己も  
 せつねへ。夫は宜が追かけて來やア止めへかな。殿一の誰が來るものか。ろれじやア  
 此處で仕度をせやうと草鞋をはき。大小を差などしてホツと一息つくなるべし」(こ  
 、にまた虚呂松は女の姿の衣ものさへ。帯さへ華美な形ふりに。抜衣紋でござ腰のつ

まを高く撮みあげ。赤い蹴だしをびらつかせ。透返くとあるきながら最早後見のき  
 そうなもの。どふりかへり見れば彼見へぼうな石間の大愚が相も替らぬ大めかし。オ  
 ホンくで通るを見付「モンめの大愚はん。大くはんといッたらサ。お待なはいよ  
 う大愚はん。と呼かけられて大愚の振むき。みれば見なれぬ大女頭巾に顔をすッぱり  
 と包めば誰とも當りが付ざる故。不怪そふに監へて。アノ僕に聲をかけ給ひたるの貴  
 尊で有やすかぬ。ハイ私きでありますよ。と大愚が五体へもたれか、れば。大愚の周  
 章て飛のき肝を潰し。上目でじろくみる川笑さ。一何だらうぬへ初卵に。是非勝  
 引からと約束して置ながら出し抜てサ。夫だから大方餘處のお楽しみでも連れてお  
 出のに違ひあるまいと思へば。くや獅子唐獅子文珠の獅子。とツビきびいの角兵衛獅  
 子で。さか立てあるいても私きのやうな。一文獅子での御意に入らぬの知れてゐるが  
 人の女獅子をすばんとぬいて。彼様してお前がは出なはッたかと思ふと。なんぼお前  
 はんが雄獅子でも。起請の詞が狂ひ獅子と思へば。ほんよ腹の立私きの熱の手負獅子

見すてられ、ば猪の獅子や。祭りの先の獅子頭。餘所のはやしもはつか獅子。エ、悔  
 獅子。憎ら獅子。鷹立獅子とい、ながら。手當り次第措りまわせば。大愚の彌々駒り飛  
 ひて。アノサわ、いたくと飛除く。わッけに取れし其風情。虚呂松の頭に乘  
 虚呂 一あの夕べまでも今劇迄も枕ならべて一所に寝て。其方を向の此方と向の。エ、い  
 としらしの可愛の。肌目こまかで弱らかたのと。恥かしがるを撫つ摩りつ。人を  
 さんざん彌つて置て。其様なるのよな言譯を。少さい時からなまなかに。手習迄も一  
 處よして何やら双紙へ書たのを。其方に見せて問たれば戀といふ字と  
 言たのを。結び始めの殿御者やと思ふて居るをそのやうよと大愚が五体へかぢりつ  
 けば。大愚ハエ、と震へ上り。冷汗をかきながら頭巾のうちを能々見て。一エ、何  
 の事だ面白からぬへ。何人かと思ひ苦すれば虚呂松大人。アレく人が集ひ見るハサ  
 何らの御催ふしか知らぬへが。その御姿での眞又詫入是ばかりの閉口だ。モシ大人  
 〇と言釋だから失敬の大きおん見なしとして。お先へ御免を請り羽織も。恐れ入谷



藤花  
 赤いねく  
 よき  
 拾の福

の鬼子母神に對するやつかぬ。何はともわれゆるりとおしげり。オカン〜と逃山大  
 愚が袂をしつかりつらまへ。何だらうね〜一所に往てお呉んはないよう。何は私  
 だた福だとして天の岩戸のおとびらき。別けば同じ谷間の水お難煮ばしやかな火ばし  
 せめての天神はし迄もお供をさして下さんせと否がる處へ付込で。恐くもた付か、  
 れば。大ぐいほどんせむぐねしさまよて。大愚「イヤわれ一寸と見たまへ。是ハ奇てれつ  
 なものだとされて。虚言に何か通るんで有ますかへ。と彼方と向と後から來か、る男の  
 蔭へ。ちよいと隠れて横町へ大愚のころ〜逃込を。虚呂松の氣がけす。イヤ悪ら  
 しい人よ顔を見せるが否だと言て。人よ彼方とつんひかせ夫はど私が否ならば。私よ  
 く生れて來ぬがよい。往來おかでも眞晝でも。惚たよかげんが有物か。此方の殿をど  
 言ながらそばへ來か、る大男を大ぐと間違へ腰のあたりへかざり付ば。彼の男の肝  
 を潰し「エ、この愚鈍め踏潰すぞと大手を廣げて。虚呂松が頭を引摺み捻倒さんど力  
 を入。引ば髪ハ頭巾とともよぼツかりぬけ。力まけして仰川よでんぐりかへると生

憎に。凌ひ上たる土溝泥の中へ半身うづまるを。見るより虚呂松手をのびし頭巾を  
 取て立上り「けはい化粧や振の袖、女々しくつくるの世と忍ぶ。假の姿と  
 知らざるか。へへへるのへツかツかうと尻を叩て逃出すと。横町から  
 荷ッて出る蓑桶へ出合がしらに突か、る。其桶揺れてどんふらと隠れるこいを半身  
 おびて向ふへよろけ鼻を撮んで立すくみ。ア、ウン〜奥ひア、奥ひ「案下判  
 船にのこりし喜次郎。飛入。野良七の三人の天神川と横切て程よき岸へ船と付させ。茶  
 屋へ上ッて何時迄待ても虚呂松も茶め吉も出て來ぬ。万事不案にて心にか、る事  
 已故三人は相談を付天神橋の橋下にて待こそ宜けれと決着をし。再び船に乗うつり  
 猶川上へこぎ上ッて天神橋の下に付させ。喜次郎の茶め吉等の様子を見て來んと一  
 人陸に上りて其地此地を尋ねる處。人も追々出盛りてよき沙時とぞ成にける。こ、  
 に亦茶め吉の寺の地内と立出て。後身跋助ともろともよ道と急ぎつ、兼て相談さめ  
 置たる待合茶屋へ至らんと。法恩寺橋より眞直又天神橋の橋でまへ進來り。彼方を見



ると喜次郎の彼歌修行のこしらへよて向ふ河岸をあるいて居るゆゑ茶「ヤあれく喜  
 次さんが歩行て居るぞ」とれく何さま兩方の脚で歩行てゐるの茶「して見ると直  
 り始める了箇ぢやアねへかなア」ちよつと待給へと橋の下を覗て見いやアしめ  
 たく船も来てゐる哩。は前の早く船へ往てろの趣を通じ給へ「ヨットよし〜  
 く」と跋助の棧橋を下り茶め吉「身構へしながら橋の上へ行向ふ。喜次郎のかゝる  
 べしとの夢より知らず。向ふより斗り氣を入れて心付すま行んとする。紙布の袂をしつ  
 かり取「ヤア逃るとて逃そうかと引止むればエ、と胸りし振ひきみると茶め吉故  
 〇よがりきつたる顔をして喜次「出し抜は何様したものだまだ狂歌も讀ねへうちよ。何  
 で其様よ取違へるんだい。出抜だらうが取違とふがもう彼様なツちやア武士の意  
 地。壁へ狂歌のよまねへでも。讀ろうな面だから未前を察してとらへた訣。成ば手柄  
 よ探て見ろ。ち、なんとヤイ坊主と少し氣取て仕かければ通りが、りの老若男女。  
 ろれ喧嘩よと立さわぎ右や左へ馳はしるよ喜次郎も今のは是非なく「こゝ理不じんな

るお武士。何科あつてとゞむるぞ。さきりく放して通したまへと紙布の袂とどらへし  
 手を一寸拂つて突戻せむ。たぢ〜とよるける足を踏まめて。ヤアちよこざいな齋僧  
 の腕立くわんぬんしろと手を伸し脊中の木刀抜んとして先よ半九郎が家よ轉びし  
 時木太刀の彼處の玄關へ置て逃來りしを思ひ出し「ハッ」と狼狽あたりを見ると搦掛  
 商人の天秤棒が建懸れば。周章てかけより引渡つて持來り「わいらがやうぢひよ  
 ッと坊主の。木太刀などてへ忽休ねへ。天秤棒で相應だサアかくとと去ると打て  
 かゝるよ喜次郎の困りきつたる顔をしながら詮方なく襟よさしつる如意を取て立廻  
 る。然る程よ虚呂松の糞取桶よ突あたり。むざんや半身黄よ染て其臭こと夥しく。  
 幸ひ取たる頭巾を冠りながら逃來れば往來の人「ろれ糞女だやれ糞だチ、臭い  
 く〜とよけて通せば天神橋のさわまで馳來ると。折よくも試合の局中ゆゑうまいと  
 こだど若打まながら「まあ〜待て下さんせと二人が中へわつて入まぞ。其臭さ五  
 臟をどはし喜次郎の茶め吉もうんどばかりよ反かへり「こりや何様だれ形ハエ、臭



へ。ヲ、臭やと二人どもも逃出すゆゑ四邊のこん雑然鼎の沸が如し「是より先に  
 跋切は棧橋を下り船の中へ飛乗みるに野良七も飛入も踏どりかいつて大鼻息。これ  
 の何様だと揺ぶれど。叩けどさらには性たいたさど無理無体に引かこせば。二人の周章  
 て寐耳に水。調子の合もあわぬも足踏の相圖も更よいらばころろばなる三味線を取  
 べんべこべんく。どやたらと弾立る處へ喜次郎茶め吉鼻を撮んで逃來り船の中  
 へ飛で入る。下太郎も有漏く。此處へ来たから此有様を見るよりも同じく船へ入らん  
 とする時。驅くる虚呂松と思ひすばったり突當り。下太「コリヤなんだヲ、嗅へ糞だヲ  
 、嗅へ。虚呂「わツちも誠又臭いく。と二人も船へ飛乗ば。舳をぬいて舟掉をぐツと突  
 張るるの拍子。無のゆらく。と中流へゆらめき出れば飛入。野良七。此處を先度と  
 ばち打付ちやんく。ちやんく。すちぢらからちやんく。ヲ、嗅へ。三味「ちやん  
 く。く。お、嗅へ。吹よ糞風わがれよ。藤「ちやんく。く。すちぢらからちやん  
 一同ヲ、嗅へ。中の小唄の顔見たや。三味「すちぢらからちやんく。く。ヲ、臭へく。

と天神川を押下り堅川通りへこぎ戻りぬ

編者曰サテこれから。彼の柳橋の能樂亭まで上方者と稱する髪結の爲よ下太郎の頭  
 髪よ非常なるヒツツリを拵らへる可笑味より廣小路の麥湯店を目的に運動と出か  
 けて喜次郎が案じよ依り枝豆賣の田舎翁と謀るところあり。又兩偏人の新造と年増  
 兩個の美婦よ心意を奪とれ興に乗じて門附と姿と變じ大道せましと押出す。茲よ於  
 て田舎翁これと惱ます。又喜次郎の一座の相撲自慢の或る大男の爲よ涼み臺を轉  
 倒す大騒ぎよ至り遂に婦人等と引連れて戻る場合よ及び例の石山の犬愚先生なる  
 者。フトした所より止むを得ず盜賊と變じ部下と共よ數人の男女と驚りす其大愚た  
 る所業より種々の事柄あれど當編中よ盡と言を得ざれば。第三編よ充分これを顯  
 はず。云ふ趣向あり。但し第三編以下の如き。初編貳編より其事件其はた多しと雖  
 ども直ぐよ引續き十日を出すして出版仕まつる間諸君客宜しく御高評を願ひます



妙竹 七偏人三編之序

林話 七偏人三編之序  
 怠麼妙竹林話の服稿と言は。人心同トウらざる七編人。劉伯倫に  
 似た酒風漢あれそ。阮籍れ如く醉放人を白眼もあり。阮咸に似て  
 犢鼻褌を竹竿に掛。七夕祭りをあけ如き白漢あれハ。王戎の如く  
 日輪と白眼競する倭個あり。稽康ふ似て酒斗飯で無言あるあき  
 ハ。尚秀の如き寂好あり。又山濤ふ似と多弁あり。性愚あり。性直  
 ありて。計較ふ興あれそ。言語に絶倒ある。其筆頭の機關ハ。覗て  
 知れぬ江湖上の。滑稽洒落の中道を探り。人情世態を細末に穿ち。  
 猪踞もおくれぬ當時の流行。世界の魁作者の旭。大庚萬株の椽亭  
 主人。其名ハ四方に陰れなく匂ひハ築紫の邊地迄も。風に薫りて

飛煤の。とんと評判よーと聞。書肆に次編を矢の催促金鷲の弓の張習かゝて。當りを覗ふ得手の拳。茲に三編稿脱りて未序文のあさを伴僥。僕も雜魚の大魚交詔。陽魚。齒怒端出を。人並らちくも述るに南

春霞樓の北窓に筆を染て

鶴秀賀識亭

妙竹 林話 七偏人 第三編 卷之上

東都

梅亭金鷲編次

借も七人の能樂者どもい。春の朝の酒機嫌妙義参りの初茶浴。天神橋の一趣向ヤンヤと言せる計較れ。手とづが瓦落狸くひちがひ。遣り指絲一も一興と用意の船お打のりて堅川通を漕戻し。其後のさせる事もなく昨日お今日と打とぎて。罌サ彌増す夏の日も水無月半端と成りわたり。却説彼の青柳橋ある能樂亭の主人の喜次郎様先小髪を結せて居る則小寂ころんで居る下太郎跋助。喜次郎の髪結小髪のとこつを渡せあぐら「刺公お前の上方の」かみゆひ「左様でござります」上り何の邊だ「伊勢でござり升 下太」伊勢さくら膝栗毛の喜多八が古市で髪を結せさあお前ぢやアねへり「膝栗毛の喜多八さんぢやツ」やう何トやうおらら旅人ぢやで。とツと分らんがナ「おめへの前で左様言ふ腹を立たらうが伊勢おらら。このい、やうが何様も下手の。エ、と。エ、夫々古ひ落し断し小蛇といふ名の何様一て



三  
ま  
ん  
の  
り



岐  
助

景の橋國兩

深  
ま  
り  
の  
形





付このだらうと聞ふ。彼の蛇といふものが蛇のうら蛇と付このだと言ふ。蛇も蛇れば蛇るものだと言ふ。断一が有。何でも上方の髪結の江戸の髪結り見りやア。髪結といふのぢやアねへ化結といふので。お前さんの遣ふの髪結ぢやアねへ化刺といふのだ。空然きて喜次さんの化毛でも刺落さといけねへせ。喜次「宜よう騒々まいのノウ親方。いろのでさねへ奴といふと口がとるくって成ねへもの。下太公今お前の左様いッ。膝栗毛もある喜多八が古市で髪を引つめらさ」と言一件の眞お彼がッ。下太公「何の彼様お事が有もん。自己あんども引結ッ。髪が好ぶろ。思入固く結て貫う方がせい。左様でもねへ悪く引結らると天空へ何うかぢり付て居るやうで耐へらさ。所が天空を持て提下げらると様おのが能の。夫でもお前の髪随分寛く束であるせ。是ごう何様も氣入らぬへ。二人が断して居るうち喜次郎の髪を結上「ヤレ〜大さお御苦勞ッ」と立上ッて後方を振む。何様だ下太さんお前も結て貫ねへく

下太「左様さ結てもい、何様さ化結さん。ぐり引續て遣ッて貫へてへが引結る事を知ッて居るう。お江戸おきんであア。宜い結きんが遣ッて見ませう。其様お一番束ねて見て呉ねへ。喜次郎が立る跡へ居り込。銅盥の水お顔を濡せば髪結の後へまひり。是りやア。下太公の髪赤いはうが多いうら伸して梭欄掃屋へ卸し。役様いふお髪を長うま。とッと埒明ん。私の知とる人があア。調度此方の様お顔であア。梭欄の毛のやうお髪を長う伸してぢやア。子供等が蜻蛉をまばるとして其人の顔を。馬の尻と見違へ赤い髪を尻尾ぢやと思ふて。引抜て往るので蜻蛉の居る時分おもてへ往るとゑらい。災難をさるうらとて家よばり居てぢやア。馬の尻だぞと。つう當付る。下太「チャット動くと切ますぞへ。切らさくッても切さるよ。やア痛へり。澤山ア。エ。此髪結公と東浦塞二ッといふ。鹽梅お似て居る顔よ。其奴が堀の内さまへ参ッ。時。四ッ谷の街道と牡丹餅と買て喰



〇七偏八

第三編卷之上

〇九

梅のつらさのちりま  
はなはな  
き  
かめ



〇七偏八

第三編卷之上

〇八

かぐら歩行て居ると。向ふり来馬糞浚ひが竹の先へ附へ蛇ッ貝を以て。今牡丹餅を撮んで口へ入やうといふ。柏子小題のところへぐいと突付さう。何をいやアがる鈍痴氣めエといふと。馬糞浚ひが肝を潰し。コリヤ何様ぢや馬の尻の穴う糞が出るのうと思つさう人間が牡丹餅を喰て居るのう。物を言さう口ぐと思ふが黙て居て何様しても尻の空と一見ぬぬと言さう。サア頭上を濡さんせ。下木一ツト承知さう来さう。天窓を濡して突付ば髪結の下太郎が月代を探ながら「イヤ此方とんのか頭と見さで思ひびー。先頃柳原で一而凸凹のある。ゑらい大さな薬籠の直と付さダア。下木「フウム青柳橋をまいる髪結の天窓小似て居る薬籠が出て居ると言さが大方夫ざらう。喜次「何だうべさばうと舌戦わつて居るのチ。下木「下太公の天窓の上へ親方の天窓が重つて居ると。まるで銅の瓢箪といふ鹽梅小見えるうさ宜ぢやアねへ。元々天窓の青うあり。凸凹も見えんやうな成傳授が有ダア。その傳授の稗を買て来て粘へ雜その稗粒を天窓の赤う成さところへ平うりと塗付。水

打て乾らんやうにして置と頂天の熱氣で一晩も過ぬうち。其稗粒が蒼う芽をふくので月代よりの何程う奇麗おさる事ぢや。下木「チット化粧さん其様お根揃ぢやないうねへ。もつとぐつと引詰て呉ぢ。かみゆひ「私やゑらう詰る事い不得手ぢやでア。ト何うぐづぐづして居る故下太郎の鬨に乗て膝栗毛の喜多八ぢやアねへ。上方仕込の根を詰て得得ねへうら困るもつと思ひ切てぐつと遣つて見させへ。何でも自己の様お容おの結人の方うら二十八文の出しても宜の。根を何めて結とを敷えて貰ふの。かみゆひ「是とやアもうお前とんの言えやる事本問ぢやない。〇ト言おがら下太郎が髪根を力一を引詰さ。天窓の皮へ四ツ五ツひだが出来。眉毛も眼も釣上ッて仕舞おる。下太郎のとつと思へど今更寛めてとも言さね。下木「まじ小い緩いやうなげさどこの位おら不勝して置。かみゆひ「よりや大ぶん端毛が長うおつさうい。鬢の方へ蟬通して結て置さするぞ。〇ト下太郎が天窓の鬢と後の方へぐつと引出して結仕舞と髪結の鬢を直小引下げ。かみゆひ「旦那とん左様あら。ト忙がーさう



お出て行。喜次郎の下太郎の顔を見て「チャ〜」お前の顔の何様さこのご。積が出来るせ。喜次「其のすべア毛穴が一本々々お持上って居るのごものチ。開いてチャ〜泣弁慶を見やうも眉毛を〜て眠のう夫ツさり明ねへのう。下太「何〜ても晴〜が「チャイ」跋さん此處らお自己の煙管と煙艸入が在だらうとってくんねへ。「いけ懶〜を男ぢやアねへり。トぶんできとらッ〜。下太「探うと思ふけさど見付くらねへもの。下太「直ひごの脇おわらア。開いて何故首をすへて向ふばかりひひへるのゴイ。下太「下の方が見らざるくらゐあらお前おとって呉ると言てこのさやアさねへり。喜次「エ、そこをちやを汲で置湯飲をひっくりけへまやアガッ。何で下も見らさねへ程髪〜の根を引結さ〜。下太「引結さ〜。んぢやアねへ化結ごの何の〜。喜次「恐口をさ〜。もんごうら引結らさ〜。のゴア」此時表の格子を明け。狼狽て入り来る長野七飛

八「チャイ〜喜次さん。跋公や下太さんの何處へ往〜。其處お居るのが見えねへの。野良「エぞき〜。ト下太郎を見て。ヤアお前何様〜。の。チャ〜。其顔の百眼の通人といふ眼お成さぢやアねへり。飛「ウ、ッ其鬚の何といふの。自己アお前ぢやアねへと思ッ。の。チャ〜。天窓の毛の穴が一本〜。お盛上って居らア。何故此様お引結て結〜。の。夫とも茶番の趣向でも有といふの。下太「氣樂事事を言ささんぢやイ。飛「チャ否お熬やアがるトやアねへり。野良「下太公の疝が起ッ。の。ごらう眼付を見ねへ。何〜。しても通り過ちやア詰らねへ。チャイ喜次さん下太公が首ツ丈といふ麥湯の姉さんとのが向ふうら来〜。うら一寸見させへ。ト窓へ駈往格子の間うら首を出〜。早く〜。と叫ぶ。呼立るお喜次郎もどき〜。と立出て「フウムさ〜。美〜。代物。の。チャイ下太公早く来て其引詰〜。ところを見せて遣ッ〜。下太「其様お甘口で謀ささる様お自己〜。と思ッて居るの。野良「否お疑りやアがるせ。飛「天窓の皮を引つッ。ので根生へ斜が出〜。の。も知さねへ」此時表を通りか、ッ。年増女と新造が野良七飛八を見て。下太「チャ野



○七偏人

第三編卷之上

○十五



○七偏人

第三編卷之上

○十四

良さん此處が貴君のお家なので御坐います。一んち「飛八さん昨晚の御馳走」些おより此處の自己の妾宅ごうら。飛「野良さんの園の女といふのをか知じおとるうら。ト言ながら彼方お一人居てゐる下太郎が手を探して早く往て顔を見せて遣ッせへト無理無体お引立を。太下「アイタ、エ、何をひどい事をやアがるのゾイ。飛「何故横目で見ると見るんご首の傾らねへのう。下太「大盛をとると髪へ開くうら静うふろイ飛「チャ〜くお坐頭を見えやうごソレ〜煙草盆へ蹴瓜突の。何で此様お天窓お結やアゲツこのごあアと窓の所へ連れてゆき。飛「サア野良さんのお園さんを連れて來させと言時下太郎も窓の格子くら首を出し。此處の私のお家さんごうら些お遣入んおといかねへ。ト言きて女の顔見合せ少〜躊躇居り〜の。新造「チャ下太さんで御坐います。一んち「ホンニ下太さんごよ。新造「晩おの急度おいで被成ヨ。一んち「他へいらッやると聞かせんよ。下太「又恍惚と請させやうといふ了箇う。何様も成ね〜ぞ。一んち「チャ逆ねぢごヨ。一んち「眞正お往をといヨ。ハッお成ても七ッお成ても待て居ますうら。

下太「ト言て墮落の雅邪とさきて。少熬おんどやア恐るる世。喜次「ハ〜おこの〜さ世ういごあア。ト手をのばして下太郎の尻れ傍りをチツクリ措き。下太「アイタ、トト身を反す拵子お窓の上お在輪七五三をうけの折釘へ髪が繋り引く、りふら下げらごの如お成故。いごいごいご髪のお毛がいよくぐツと引釣て耐へかぬごど例の見えばう首街のば〜爪爪いごさごのんで鬚ぶしを引掛〜あり〜ぬうら。下太「晩おの萩豆と茹玉子の物仕舞とやうくしやせう。一んち「きッとでございますヨ。一んち「下太さんの大そう丈がなう御坐いますねへ。開ておくびが長いうら恰合のよいと。一んち「よるお目おかゝるとお様おあたりいようおやア見えおいねへ。野良「何お〜も這入んねへお。一盃遣付るとさやうぢやアねへう。一んち「有ごう御坐いますごちツと急ぎますうら。一んち「左様お晩おどのお待まう〜て居ますヨ。野良「穴ツをいりごまぢやアいうねへせ。下太郎のよこめめて。二人揃ッてあるいちやア眞お二千兩。飛「自己アゲツとうら。二万兩といふ入札おまやう。一んち「チホ、ハ、ハ、ハ、ハ、左様お



の故意と上りとて聞たもんぐら。向ふが口を合せていせだこたへゝのだア。すると果して跋公と下太公とばうお仕始めたので。とうく木お掛られて仕舞たのだ。下木「思、しい目お逢えやアがった毛穴が一、びりくくらア。野良「夫でも顔の風の髪ッたところを麥湯の二女お見せたりら怒るゝ有めへ。跋「エ喜次さん晩お一所お歩行ねへナ。喜次「彼やア梅の本といふ行燈の出で居るのり。野良「左様さ。として年増の名がお麥で新造の名がお白湯といふのだ。飛「あうく面白代物サ。喜次「夫ぢやア晩お往て見やう。下太「所が年増のお麥めい自己お九分九厘来ッて居て。新造のお白湯の九分九厘九毛。今紙一重といふ所で出来るのだから。迷ひして留すおせひ指へて仕舞てへと思ふのぶ。ノウ跋さん。跋「直お新造の下太公お氣が有のサ。其所で年増のとうの自己お十分油が乗て居るといふ證據の。熬ッたいよと言ながら指られた悲の。是見ねへな。ト二の腕を捲り「 Chatt 此方での無クッ。此方の手よ。ソラ紫式部の筆の綾といふところの薄そり残ッて居るだらう。是だものチ耐へらさねへのも無理

の有めへ。下太「夫おノ。新造めが男の美くッて程の宜もの急度水性だが。おまこんの男もよし程も能ッて實り有のだから。頼母敷のだよといやアがったアな。飛「ア、いゝ、エ、何故人の脊中を叩いそんだイ。下太「二ッや三ッ叩うきたッて自己の様な好男子又似りやア。まんざら損も往めへが。飛「呆さけへらア鈍痴氣めへ。跋「其處で晩お愈が彼奴のところへ往て呉ると極ッたら下太しうと二人で連中お侍と有。といふなア外でいねへ例の嗜の隠し藝をあらひして。彌惚として仕舞といふ段取だ。下木「全体太棹でぐつと濫く往てへのだが未だ儀太の方の不飲込だらう。矢張り流行の歌澤ぶしで出りけやうといふのだ。跋「そこで自己が例の美音で唄ひ付ると下太公が三味芝ッて門附といふ趣向だが。下太公の三味での撥わたりいゝが。何分手が廻らなくッて調子が合ねへうら Chatt 中だけき。そこい自己の聲と唄ひ廻して紛却て仕舞積りだ。下木「足下の調子をトツ外すのと相の手を待ねへの三味せんで繕らチふと思ッて居るの。唄ひまひしで紛却もねへもんだ。飛「妙なのダ二人で門附お出て石



妙竹 七偏人第三編卷之中

東都

梅亭金鷲編次

日の暮たきど此頃の。暑さよ結句日中より。往來賑ふ往還を嘉次郎野良七飛八の慥  
 墮男打連だち。いつも機嫌のたうばなし 野良「のッ飛公跋助と下太効の梅の本の女て  
 多つにやアよッやど熱望よなッてゐるさア 飛「ぐから門附の趣向か何かで思ひ附き  
 様といふ存寄のダアホ 喜次「跋助もなかなう甘へ舞だア。下太もみつとさお三味さる  
 ければ何よりても其數凡第三ツと云のぢやア仕様がねへさア 野良「兩人ともいらいらッ  
 ちよ打合して在から。數ハ無ッてもヤンヤトうけるさでゐるんだアな。どころを一ば  
 ん面白可笑く苦しましてたのしむ。などいふしはふが有そ。うな物ぢやアねへり 飛  
 「左様さなア 野良「かうまたら何様ぢらう是からとくに梅の本へ酒肴を持込。一献さこ  
 し召ながらお麥とお白湯よ思入綱纏。さやッさやと云せてゐるどころへ跋助と下太  
 効が大めかして、チ、リ、テ、ッ、ン、などいひいてきてても一かふ附付ねへ振で掛ひ付はよ

置うといふのだ。すると奴等が氣を揉で比羅金さまへ這入た盜賊を見。様小の何度も  
 此方人の床机の前へきてまごつくこと云のハ一興ぢやアねへか 飛「併夫ぢやア請  
 込が不約束お成から。然で無往てへもんだ 野良「そんなら丸ッさり餘所の見世へ上ッ  
 てゐて。やつらが梅の本のまへを彼地へ往たり此方へ往たり。まごつく。とる  
 所を見て樂まんでゐるやうぢやアねへか 飛「夫でも矢張こッちのふまよならアな 野良  
 「後で梅の本と間違てツイよそのミせへ這入こんでまッてい。といやア 宜ぢやアね  
 へり 喜次「兩人をくるしままめるといふお茶番の自己の方寸は有からまアどうするか  
 黙て見て居さッし 野良「喜次さんの方寸も餘り當おの成ねへからノ 飛「何おしても賑  
 敷事ぶなア 喜次「此處の見世ぢやアねへり行燈は梅の本と替て有せ 野良「急げば早古  
 郷の新しい口村おぞ着よけりだ 飛「イヤ今晩のお麥さまよお白湯さ。能おてんきでお  
 めでとふごぢやいッ 野良「年増と新造の標技と程の能のが大評判よ付。岡惚の我々まで  
 かたきを廣く思ふでござい」と言ながら梅の本と誌したる麥湯の見世へ這入こ。三份



○七偏人

第三編卷之中

○二十七



○七偏人

第三編卷之中

○二十六



の床机は腰を掛けを。晝間喜次郎が能樂亭の前を通りし年増と新造が其處へ来て  
 麥「野良さん飛さん先程の」 喜次「晩は往と被仰たけをどよもやと思ッへら能被爲入て  
 下とツたねへ。眞正は實有のヨ」 喜次「先刻お麥さんといふお名だといふお前さんとお  
 白湯さんと云お名だといふお前さんと。自己の家の前を通御が有たのを一眼見るよ  
 り何となくお愛慕く成て。何分我慢が出来ねへから日の暮るのを待かねて。二人を引  
 張て來たのゾアね」 麥「チャ／＼左様で御座いますか能マアお連まうして來て下とツ  
 たねへ」 喜次「私さやア實ありだと思ッたら夫ぢやア且將が引張て來て下とツたのゾ  
 憎らしい飛「アツツ、エ、手ひどい措り様とぞる濃掛ツた根太の天窓をア、い  
 てへ／＼といふうちお麥の煙草を吸付」且將「ぶく召上と喜次郎が前へ出せば」 喜次  
 「難有々々。併此煙草を此處でむぎ／＼飲なア惜しいもん」 喜次「ア、レ憎らしい且那  
 だヨ」 野良「アイマ、エ、何故大人ま／＼して居るものを措るんじイ」 喜次「チャ  
 鹿相此且那かと思ッて」 野良「此達摩かと思ッて此方の達摩を措らきて堪るものか。夫

ども思ひ入さ／＼有て間違た振で氣を引て見たのなら堪忍して遣う」此時お白湯の盆  
 の上へ茶碗を並べて持來り「櫻のお湯お致しましたヨ。と銘々の前へ出せば」 野良「茶碗  
 を探振をして手を握ッて見やうと思ふが何と握り返して呉る事の出來ねへか」 喜次「オ  
 ホ、ハ、ハ、握り返しなとも」 野良「〇〇〇」 喜次「さすともたけが覺束ねへ」 喜次「覺付てたまるもの  
 ろ。お白湯さんおの自己といふ情合が有のぶものチ。尤其情人といふ事のお白湯さん  
 もま／＼知るめへげを。去年の十月出雲の大社で自己とお白湯さんといふ割振で縁  
 結びの大帳へ記してあるのを見て來たのだ。夫／＼今日他人でも明日の墮落よ  
 成よ遣へねへと極りを付て居るのだア」 喜次「チャ／＼旦那夫ぢやア私さの方何程思  
 ヲても無多きので有ます」 喜次「イヤ／＼お前の名の所も自己の名が書て有るヨ」  
 兩人とも情人を探持て下さる思召も知を終へ」 飛「チャットお前の名の其後字消で塗  
 て仕舞て自己の名を其上へお書さすツ／＼お麥さんの自己の墮落よ遣へ終へ」と  
 何／＼三人の麥湯の女お戯遊てゐる。そのうちお後／＼追々くる客よおはくとおさ

の。又よその床机へいッて一さふゆへ。野良「時又喜次さん、殿助と下太務のこねへうち早く方寸の謀計を廻らして置ばい、」喜次「今廻らそうと思ッてゐるさうさう。飛「所を未だ廻らぬへうちお門附どのの。でうけてくると云のが落ぢやア糸へうと睡る床机の傍へざるをか、へて莞爾をさぐら六十斗どののおやぢがさうり」旦那ア淪玉子と枝豆のチウツて呉さッやイ。おれ。お愛相よ盆踊のチ。躍るべさうら。喜次「爺公おめへでへぶごさげんだの。爺「今そこを酒屋で。やたとやらを呑ふ一合ぶツくりけへーの。圖無浮きて来たがぢや。喜次「お前若エうちよ些ア道楽をー」とアあるう。爺「おれ。こらみゑても色師の天井といふぶツたアリと子。先男が好い聲がい、程の宜いから。りんそんな女子ども迄が惣こんぢぢといふ物。飛「さうさうさうヨ今でせ入。目トりぢぢがッてとぢがーらうとごーらへの。おとぢへといふ撫梅さんぢマ。さうくさうまこの有顔。喜次「とうご爺さん音曲のとうの些アやツの事があるう。爺「音曲ぢぢでからまん。ご。こゑが美うと子。りんそんなの源右衛門が麥畑へ下り。隣のヲ。追とて〇イヤこり

やア價どもチ。何故來のホウと云て呼ぶの。五町四方限一響くんぢやが。自己追又出て〇イヤこりやア價どもチ。何故來のホウと云て呼ぶると八町四方響くう。道樂寺さまのお林に眠ッて居る木兎ども迄が驚くこッちやが。喜次「そいつア強勢を聲だ時又斧さん枝豆と淪玉子の不殘で何程ばかりあるのだ。爺「六百斗も有ますべさ。喜次「夫ぢやアそいつを不殘買て遣るから。今夜の商賣を是ツきりと迄て自己お雇れ。て呉ねへりト云て六ヶ敷ことを頼むのぢやア糸へ。今よ此處へ男連の門附が來るう。ら其門附をお前の呼こんで。ト斧の耳へ口を寄何の類とよ私語て懐中うら金を出一紙へ包んで親爺お波せば。親爺の無上と點頭て「アハ、ハハ、ハハ「自己此様を道化の事。のチ。大好で味よく對談を遣ッて見せやすべさ。喜次「夫ぢやア爺さんお前の其方の腰掛へ往て離れて居ねへぢやアいうねへ。爺「門附めが來ら相圖のチ頼ますぞへ。喜次「飲こんで居るよ。飛「嫉捨山へ投りこんで狸の餌食よでも仕て仕舞ふと云様さ。爺を引摺こんで彼が方寸を廻したのう。野良「彼様を半可通を半醉爺と門附を呼込した

ッて詰るめへが「半可通の半醉だくら此方の謎へ向きのづ。まア黙て自己の爲る事を見て置て後れ手本おするがい、野良「枝豆と淪玉子の有らちの何とでも云させへ随分六百丈の所の請て居て遣るから飛「オイ〜お婆さん玉子と豆の大番振舞が始まッからのお白湯さんを誘て些下司張お來給へナ「マヤ難有うお白湯さん「聞ぬま〜よマ「早い耳だ給へ「玉子といふ聲がまぢやア我慢が出来ないのだから喜次「サア〜思入遣りか〜給へ「私さやア枝豆が大好「お婆さんだらば〜とバツ付が宜らう「自己も勢分を付て八百投でも推始めやうう「サホ、女ハ鶏卵を喰ても何にも役ない立ませんねへ「野良「役立給へ事ハねへ澤山喰ハ随分腹ハ張て來りア「飛「時よお婆さん些改めてお前ハ持とが有。ト云あア外もねへ情合も成て貰ひてへのだ。と聞らぬお前ガ。私ハお勘平さんといふまふがゐるといふだらうガ。其勘平さんといふまふのトやまよのあは給へのだ。お婆さんば今すぐぢやアねへ此次の世ハいるよ成て呉といふのだ。尤今すぐ成て呉りやア夫ハあ

事ハ給へのだ。子の日の小松と來て更手數多のおばくさんだか。とへこがれて死かると云ッて。諾。云ハ給へのだ。こッちも承知。エおばくさん死で生を變るこゝの世から。かゝい相づからいるよ。さッて遣らと承知。てくれても宜らう。若承知して呉るから此世ハ都合を。て置給へけ。やア成給へ。と云のハお前ガ八十で死ハ自己ハ七十三で死。お前ガ百で死ハ自己ハ九十三で死。と云のづから。そのおめへの死で行年を聞て置てへのだ。お婆さん。ば七年先ハ死で七年先ハ生れてゐる。と。自己ガ二十三ハ成時おめへガ十六ハ成か。と。てうと七ッめで相性といひ年頃と云五分でも扱めのねへ墮落ガできやうといふのだ。夫ハおいらハ成駒やと。島やを成田屋で茹雜た様お男ハ生さ。お前ハ大和やと音羽屋をさのく小やで搦。ハ。たといふ様お女ハ生れて出るから。二人並ん。す。た。と云のハ。梅ハ。櫻ハ。桃ハ。牡丹芍薬ハやめ。杜若」と云あ。から枝豆を。とッて。く。い。ふ。と。て「コウ〜自己のおばくさん。をくどひて居るうち不殘売おまて。マッ。と。野良「此世でハ。から。成ても。こんどの世ハ

おめへふくのきるとよ。「飛さん夫で、後世のおまへさんと情合ふありますから。其時のつつけとも結納とも思ッて一ぶくつけておくんさといさ。「私さやア生れかハッて恍惚のき、てお成ますから。其時の請負の前借は玉子を思入喰ですヨ。「開きやア能がぢ、いめエ。アレ〜げたを枕おいて。寐とトめやアがる。チイ〜ぢいさん起てるさくツちやアいけ糸へせ。「芋の畑へま、れ番お往やアしても。そべり込で居るとま、めらがぶれる居ねへと思ッて出てくるぶア。そんごからおれ臥りてんで居ると門附めらも唯も居糸へと思ッて出て来るぶア。野良「ウ、ッ。「獅子と鳥退から一所よ〜てもい、けれど。野猪と門附を従弟か兄弟のやらおでも思ッてのやアからア。飛「アレ〜とら〜寐て仕舞アガッタ。喜次「チイ〜爺さん寐て仕舞ちやアいけねへと云事よさア。ぢい「やれ分解ねへ自己猪のう番よ。喜次「これサ爺さん猪の番を爲るのど一所おまぢやア違ふぶらうぢやアねへか。ぢい「ハア違ふかチ。夫ぢやア自己監え横ねへた。何でも猪が四四で十六。門附が三味せんのを持て来るで其三味線の

三筋の糸の三と猫の皮の四乳の四とを掛合〜て。三四十二と成から四四の十六と三十二と大けへ變りもねへと思ッたぢや。野良「何でも宜から起て居て呉ねへぢや往ねへ。「折角一寐入爲べると思ッたよ何でもハアま〜お成ねへ浮世ぶア」トむすり〜起上れを。飛「ヤア爺さんお前の鬚ッ節へ枕お〜た下駄が引掛ッて居るせ。「道理で天窓が。げへお重いと思ッた。飛「エ、夫とやア自己の下駄ぢやアねへか。「何ぶか此處お脱で有たがぢやト手を上て鬚お掛り〜下駄を採。是大けへ匂ひがする。エ、臭い履物ぢや。飛「臭へ等〜自己が犬の糞を踏〜のぶものチ。ぢい「何の事ぶア小穢へ。飛「是は何故投て仕舞んぶイ。喜次「爺さんと懸て旋の泊り。心の臭枕といふの何様ぶら。野良「自己の先おの爺さんの家を轉りと寐たやらと思ッたが。失張天窓臭ぶ。飛「天窓臭も鼻を撮とち。何様聖天町の方ぶらう。親爺の大口を開て欠とまぢから。野猪めらア何イまて居るぶアか。げへ遅いがぢや。ト證く折りから五ツの鏡ゴオンム、ハ、ハ、ハ。「爰お亦跛助と下太郎の喜次郎。飛八。野良七の三人お別れの夫々お支度調

へ家を立ていで 下太公お前撥を忘れちやア往ねへせ 下太「撥の忘れねへけれど三味線おの恐るる。彼處の近所へ往までお前持て呉ねへか」夜ぶものヲ構うものかを 下太「儘よ引荷げイ」下太「チット俟て呉んか。此處等お藥種屋が有たッけ。聲出藥を買ふといふの」今飲ッて今騒も止めへ 下太「尤生姜湯でたて付て三杯とやらうーのうら。大分咽喉の鹽梅が宜様」一番唄て見やう 下太「夕暮と我物と」ニッで請やうと云の」うら強氣ぢやアねへり 下太「お麥めと惚させるの」宜が除り手強く。むらとさせたら直お女房お成うおんのと云やア止めへり 下太「お白湯坊の自己の顔と見ねへ振でちよいと見るといふ目付が可愛くッて成ねへ。コウ惚るといふ物の妙なもの。此方が飲りけた麥湯と一寸置と。何時の間より其器を取てぐいと飲ながら甘いと舌打を爲る。その舌打のチヨツと遣ッた奴が耳へ付て。家へ歸ても寐とびると云の」何様ごらう 下太「何おーても喜次さんごの飛入の野良ごのと云の」腹の内。嘸格氣がやけるごらうよ 下太「兎も角も連中うちで女お手ひどく惚らしたといふの」

前と自己斗りごらう 下太「女といふもの」少の所で思ひ付物と見えて。此間の晩お麥めが腹が痛へと云うら。自己が腹が痛く吉野へござれと遣らう。たら。チャ一 下太「殿さんの古風な事がお好と見える。古風な事の好お人の急度律義で實がわります。と云やアがッたが。夫うら些ッ、趣いて來たやう。下太「何おまても徐々手拭を冠うぢやアねへり」下太「違へねへもう本舞臺へ間近く成た」と是より二人の手拭冠り下太「三味線の調子をテン」と合せながら 下太「此位で宜らうの」大道で遣るおア些高へ方が宜。下太「餘り高くえてカンの所が出ねへと往ねへ」我身ながら小意氣お聲ごよおア 下太「此處いらうらをッ始めやうぢやアねへり。ト推を強くも下太「郎が三筋の糸へ撥と打付チンチリンッ。チリンッ。チレッテ。トツチンチレッテ。トチナリ シヤン」と弾ながら行。彼方ある麥湯の見世おのくより待構へる喜次郎が「野良公飛公の三味せんが開らーいせ」野良「違へねへおきだく」調子が合ねへと見えて。チャ一 妙お音がする 喜次「ナイ爺さんソレ其處へ三味せんを弾て來たの



が开だうら先刻の事をヨ「安心して居させへちゆつたら」此中下太郎助の梅の本の前へ來か、り。見ると傍への腰掛お喜次郎始め皆居る故。下太郎此處ぞと反身よ成成チンチリチツツチンチンツツチンツツチンツツチンツツチンと態と床机の傍へより通りか、るを豆賣の親父のこ、ぞと大聲で「こりや猪ども。ヤさうでねへ三四十二のうどづけめら此こへ寄てくれさせへと聞てびつくり助の下太郎がそでをひッ張「サイ〜おつう我のこを野猪だといッて呼やアグツたせ」下太「そのうちおやアさトさんがこを掛るだらう。うまいを向ふへ往がい、」チ「是りや呼るのよ何故こんがぢや。一ばんうたッてくれさせへ。門附ちゆつたら。うどづけや。」下太「うねへせ〜」下太「あせ喜次さんんの呼で呉ねへのだかア」下太「今どかッた奴が履物をといたせといふらちおやぢの駈來り下太郎と助が着物の袖を繋り探へ」下太「主らお此金をやるべえうら何でも唄ッて呉させへ」と喜次郎より請取たる金を助に渡しむり無体床机の傍へひいてきて義太夫でも新内とやらでも常本でも清警津でも一ばんうたッて呉させへ。

お前らがお蔭で十日べえ。せへくらうれのこッている豆と玉子のウ。六百文でうりのらッたらうもんだアくら「私ちらのハ歩澤ぶ〜といッて端唄をうてへやすのでございませす」下太「そんなら察文を唄たがようんべえ。せへもんたら新屋の孫十兄イでせへ唄ふうら。主等よ唄へねへちう事の無かんべえ。天どもこア察文も唄へねへちう事ちちら。笠松峠の鬼神のか松う。春の花咲山青へんムーンよ。鈴木主水といふウー武ウー士がちう。替女の坊節でも唄ゝが宜ウツせ」下太「エ。モシ旦那我ら等の遺るのハ葉唄といふので一寸々々とまゝ小意氣な短けへ事斗り唄ふので御座へやす」下太「夫んぶらばハ。親爺陰囊アを鷲がさアらひと云のが宜うんべえ」下太「いっねへせ〜」下太「エ。旦那夕暮お詠め見倦ぬといふのを一番唄ひやせう」下太「そらら出さぞ〜其夕暮さア相成ねへぞ。夕暮ちうと。我物と思へば大けへ馬のものちうと。櫻ゑエー櫻山茶花水仙枇杷の花ちう。此三ッさア唄う事の相成ねへ。自己意地の悪いことを云ふけはごと。玉子と豆さア六百で賣こんがぢうら大恩が有ぢやうら。夕暮も成なけまや我物も成ねへ

ぞ「ト豆賣親爺ふゆらまッて困る下太郎跣助と脇を見て居る喜次郎。飛八。野良七の三人の袖を引張膝をばッ突。」「何様ぐく自己の方すのゑららいもんぐらう。」「なりく甘く廻ッのう。野良。」「アレく玉子と豆を六百で賣るといふ事を又云ヤアグッの世。喜次。」「エ、自己があきやど云聞いて置のふ。オチッ彼。またあんな事を云ヤアグッの。」「ナニ芋畑で猪の番と麥畑で丁の番をさーちやア。自己功名手柄のう着ーもんぐらア。ホ。夕暮ちうと我ものちうの番小雇きて損ねると云れちやア。玉子と豆のう賣る六百文の恩といふ字小濟ねへぞとよ。エ、いけねく一段々化の皮と着ーとらう。喜次。」「この何ア宜下太と跣助が逃出一ーい。飛。」「イヤアあきく向ふの屋代見世へ突掛とヤアがッ。野良。」「チャく親爺が追莞るわ。喜次。」「このつア妙。野良。」「妙だくあき。ヤア下太めが轉んだと面白へく」と三人の笑壺ふ人ふなり

妙竹七編人第三編卷之下

東都

梅亭金鷲編次

再説跣助下太郎と思ひ付くる門附。一番ヤンヤと請る氣の當が外きて横台くら田舎親爺ふ呼こまき。調子狂へば唄も出す。出る冷汗ふらりうね三味線抱へて通出す。と。續いて通る跣助も其小群集を押分て。やうく少一遠除故下太郎吻と息をつき。」「ア、思々しい大汗ふ成るア。」「此へ這入て一息やらう。ト或麥湯の床机へ腰をうけさば。娘が持て来る櫻湯を駈付三杯飲やう。下太。」「はまらねへ田舎老夫小出ッ交をものちやアねへう。」「些と甘へ事があるとする直小魔のさすと言やア。世の中の當然だ。く仕方のねへが聞えねへの此方の連中だ。下太。」「左様よ自己とお前が苦ーむのを見てクッく笑ッて居やアグッ。夫小彼親爺めへの夕暮と我ものと櫻の三ッを唄ふ事の成ねへ。豆といふ字の恩が有と言やアがッ。世。」「左様よなア希有ふ此方の唄ひものを知ッて居やアがるちやアねへう。下太。」「狐や狸の人の心を能あるといふが今



思やア親爺の耳の押立の様ホチツホ。長ウツの世「さて見りやア彼爺の野狐の古狸の化のうもまきねへて腕組まゝる後方ウラ「オホン狐や狸殿との御監定無理なつに。一ツ穴の狸筋と言のお誑うさ給ひゝるものなればス。と聞て恠り下太郎助後方を見まへ石町の大愚が床机と腰を掛。扇遣ひをして居る故。下木「イヤア是の大愚先生「何様してお前さん一ツ穴の狸といふ事を「其處と天知る地知る人一の戒恐るべーサ。下僕が今彼の麥湯店の畔と過ると傍りなる床机ホ。喜次郎大人飛八大人野良七大人の高断。折ウラ小便を催す故其處なる溜桶へ龍頭を臨ませ。渡の水を落しながら聞どいゝるや白毛の老父「夕暮と馬の物を押止。摘梅をんとて美味ウんべゑト言ふと喜次郎大人が「豆と玉子と六百で賣といふ事を幾箇も言ふら仕舞おの。自己達も特とこのを白状まやアまめへうと大きお氣を揉ぐといふ事ウら芋畑の野猪ののと言ふ断。まで大柴聞やして。此處へ来て腰を掛ると兩大人の談話さていと斗と餘所の見る目も痛のーさよ。喜次君の豆賣の翁とい一ツ穴の狸て

ふ事を告まらすのも下僕が寸志。オホン」と咳拂ひ遣ふ扇の風よりも鼻息荒く断と聞「イヤ思々い奴等ぢやア。下木「道理でくつゝ笑つて居やアがると思つ。跛「まうー宜氣味がある彼親爺めが紙へ包んで金を呉さぐ。大方連中ウラ出ーのぶらう買喰ひでもして遣るべし。ト袂ウラ取出し「ヤア是りやア金ぢやアね。下木「何ぢ大黒さまが付て居るのう。跛「何ふしても意遣げへしが有さうあもんじ。下木「全く自己とお前が惚らきこのを猜で悪さを計較やアがツこのぶ。跛「出来かハツの情合を共々探持て呉やうといまねへで邪魔をまやアがらうといふ存ト寄から。のう下太公「左様さく此方も其氣で附合のサ。大「イヤ兎角婦人どもお思ひ染らさる端の五月蠅といふおの困り桐梧サ。ぶうら惚らきねへと宜けきと瓦の中お玉がめまやア。誰の眼も玉を欲いと思ふのの當然。實又婦人てふものが浮世無ば人お憎まれる事の有めへと嘆息爲るのの毎度ぶうら。身お守まさせて思ひ遣り梅。何事も只愛ぐひすの婆婆世界サ。下木「开とやア宜が大愚先生大分大きな包をも持て。好男おの些不似

合な譯ぢやアねへう 大「所が供お持せると家へ知ると言ので自身力量を費やするも。失張通が身を喰ふといふ本文通りサ子 跛「ハ、ア夫ぢやア彼の方へ仕送るのふ些差支へといふ一條で 大「是はさうり仕送らきて暮す身を仕送ると見らさちやア情ねへ子。有様の今日梅の本の齋齋子がところでの茶番のまゝ浚ひが有やー。○尤忠臣藏といふ題で下僕が五段目といふ欄子。其處で定九郎と遣ると云やつたうら其定九郎の着付が此包この内お不残有といふ一件さ 下太「夫ぢやア突張て居るおア朱鞠の大小だ子 跛「全体定九郎と野猪を早變りも遣ると大愚先生おやア打て付さ子 大「併豆賣の翁が居ちやア野猪も餘りヤンヤでも有やすめへ 下太「豆賣の老翁といやア何う意趣げへーが 跛「イヤ有々甘へ事を盛げへへ 下太「開とやア難有へ。さういふ趣向だ 跛「何でも喜次さんを引張て野良七と飛八めが例の通り見世をーまふまでゐて。お麥ばうどおさゆばうと送って行お違へねへうら。その送って行途中お待ぶせをーして居て追剝といふ趣向で。驚ろうて遣うといふのだが左様とるおいせひ大愚さんお加勢を。

お頼まうささけりやア成ねへ。と云譯の定九郎の着付さ。ノウ下太公。大愚さんが此苦まばーツ顔へ中五分は髪で黒羽二重の紋付。萌黄博多の帯。朱鞠の大小をまうも落し差う何うで往來へ立とだうり「サア野郎ども身ぐるも脱で置て往と云と。自己とお前が着物の裾を尻ツさりくると端折。手拭を東浦塞かぶり又斷の下で引結び。鈴が森の雲助といふ見えで「チウ親方の仰の通り此街道を夜よあり女と連て通らうとい餘り押の強へ奴等だ。着物のおろり横鼻樫まで振って置て往やアがれと棒ッ切で地平う何うを叩き廻して見なせへ。喜次さん始め大の億病。震へ上るの必定だ。何と大愚さん助太刀をーしてお呉あさる事い出来すすめへう 下太「大愚さんい見りけて恃まれ事な五分でも引ねへと云のが慥願なのだものチねへ 大「オホン夫の下僕が追剝の親方よ成とやア此間ツくら定九郎で苦老んで居やすうら。随分とごく遣ってお目よ掛やす。夫お見渡し。所ぢやア下僕を除ると中五分の髪に似合顔といふのが有やすめへ 下太「ホンニ私ちらや跛公が中五分を冠ツちやア顧問も成て可笑ねへ。ノ

ウ 跋公左様ぢやアねへう 「違へねへ此方人等が五分月代成と〇地体の而が甘まば  
 一ツて居るのだから移りが悪い 「彼様いふ所へ出ツ交ーッが下僕の運の盡だ。一味  
 連判へ加わりお味方を致しやせう 下太 「お前さんが荷擔人して下さりやア。鬼小鎮棒。  
 赤飯は胡麻煎だ 「大愚さんが助太刀だから敵をとるよやア違へねへが。相手の喜次  
 郎。飛八。野良七。夫らはお参りお白湯と女兵を合して惣軍勢五人餘騎だのよ。此方が  
 大愚さんお自己とお前ぢやア些人数が不足だのう」ト云時後方の薄暗ら床机小腰を  
 掛りし二人の男が聲をうけ「由井の茶め雪鹿呂木亦右工門が敵打の助太刀をやら」  
 と云ツ、立出る鹿呂松。茶目吉。見るより下太郎手を打て「難有々々。まッが何様まで  
 自己達の此處は居るのを喚付」 「自己と下太公の情合の出来やうと云所を猜さて  
 邪摩を爲さる一條を」茶め 「お前達の來ねへうちうら後方の床机お掛て居て委細の容子  
 の皆聞」 「敵とねらふ祐經の落行ささの薩務佐良」 「ア、イタ、、、、」  
 鹿呂 「イヤ是のお前さんの足を踏だの。私ちの下駄の櫛齒だら別きて恐をいッッ

け 「誠まびりく痛入ッ御挨拶ッ」茶め 「いよく敵を打氣なら敵の陣所へ忍びを  
 入て」 「梅の本と聞ッうら茶目さんと二人で後追蹙て出て來たッの何り趣向が有そ  
 うかど此處へ這入て相談を付る折りら。敗軍まで前来る床机へ這こび兩所おいよ  
 く夫と推察ま」 「思ふ馬鹿御曹子の愚頭の木無者成とも思ッて居るお前が物見を  
 えて呉やア誠は安心股くりだ」下太 「併鳥屋を極て裏切をまぢやア往ねへせ」 「其  
 様な二心の有ものお何で此通り女の物さるものう」茶め 「何様でも宜うら早く往て向ふ  
 の容子を見て來ねへな」鹿呂 「其様なら一寸往て來べえり」 「いやアおイ」 「チ、チリ  
 チ、チリ」〇案下再説喜次郎。野良七。飛八の枝豆賣の親父を雇ひ跋助と下太郎と思  
 ふや、に苦まませ。追走らまて笑盡入り。喜次 「何と飛公甘く往ッぢやアねへり」 「眞  
 に自己ア腹の皮をよぢらうまッせ」野良 「跋助と下太公の何處へ通て往やアッッうら  
 飛 「左様よあア」 「何でもとア谷底り樹森の生茂たところへ逃込んだんべえ」 「い  
 よく野猪ふまて仕舞せ」野良 「爺さんなうく甘く遣ッた」 「大造な事云んでねへけ

んど糞桶なら自己一時小荷ツ、の荷ぐといふ肩だ。〇々暮の番人なんぞの麥飯の茶漬とも思ひたまねへ。喜次「何よまても餘り笑つたので咽喉が乾いて来た。お麥さん一寸一杯ツ、何でも宜うら持て来て呉ねへ。野良「何の彼のと呼付ちやア顔を見さがる屋鋪さのう。喜次「飛公何を其様小監えて居るんだ。飛「オアア無言でアレ彼處の小せへ腰掛お腰を掛て居る奴の漸々を聞ねへ。大造もねへ事を云やアがるうら。喜次「ドレ〜と耳を澄えて聞て居ると一人小せに腰掛に腰打かけて居る男が剛屋遣ひも荒々去く。コウお白湯ばう自己のカツ痲を見な。ソラ小せへ蹴鞠ほど有たらう是だうら此間も餘所へ往と。然るところのお嬢さんが島田へ掛さ金糸の大根七五三を見さ様なのを外して。二の腕を縛つらう自己がウンと力を入ると。カツ痲が脹さる都合で縛つた金糸が弗りと切たと云の何様だあらうらう。夫だうら枕ツ引をとまやア枕を搦り潰す。棒押をとりやア棒を捻り切て仕舞のだ。何でも今の世の中力も無ツちやア女が惚ねへとい可笑な理屈も成ものさ。喜次「成程大造な事を云やアがるのチ。飛「ソ

ソレおきだうら自己が聞て居たのだアな。野良「彼野良と一番尻餅を付せて呉べえり。次「何様して其様な事が出来るものう。野良「處が見なせへ彼腰掛の片端へばかり腰を掛さばやんと上へ反るやつだから譯いねへ自己が一番遣ツて見せやう。飛「是の近頃拜見事だ併お前の手際でと。野良「オアア無言で見て居ねへ。〇〇煙草を振下て彼處の床机へ出掛てゆき。チット此處の火入又火が有る旦那一ふく付さしてお呉なせへ。〇〇煙草を吸付モシ。彼様申ちやア失禮だがお前さんの宜御肉合で御座へやすねへ。〇〇左様でもねへガ力の階分有やすのサ。野良「角力なんぞのか強からう。男「素人なら五人や十人の一時又蒐つて来ても負ねへ積りサ。野良「オアア眞平御免なせへト床机の端へ腰を掛。〇〇私ちも相撲の些々取やすがの稻川お鎖が嶽。秋津島お鬼ヶ嶽なんぞの強いものサ。男「ハ、ア芝居で居るのウチ。野良「芝居で役者が去てさへ彼位だから眞正の相撲だツららト思ひ遣さやす。何でも相撲の腰力が無ツちやア往ねへと云がお前さん何ども腰力有やせうチ。男「私ち何ぞの大槩な物なら尻の下へ押かつて。腰へ力を



○七偏人

第三編卷之下

○五十三



○七偏人

第三編卷之下

○五十二

ウンと入るとミリ〜と漬きて仕舞やすのサ 野良「サテ夫の強氣なものだ何でも尻の力が肝心サ。ソレ三尺相撲といふのの有やすせ。お前さんが最些向ふの端へぐつと寄私ちの此方の端へぐつと寄。此位の間を明て置いて私ちが腰へ力を入れてお前さんの手を引張ど。お前さんも腰へ力を入れて私ちの手を引張。私ちも腰へ力を入れる。ソレお前さんも腰へ力を入れる。私ちもウンと腰へ力を入れる。お前さんもウンと腰へ力を入れる。私ちも腰へイヤウ、ンと力を入れる」と云時向ふの男がひよいと立と床机のばつり反上り。野良七の平り尻餅を突と生憎下は在雑巾桶へ尻を突こき 野良「アツアツアイタ、、、、」此時彼方の床机の喜次郎。飛八尻を突突袖を引張。野良七が容子いうと見て居りしに今腰掛のばつりど反る拍子に腰掛の端に乗る煙草盆を上の方へ反飛し。火入の落て飛八の天窓へ冠をば飛八「アツアツアツフル〜アウ」野良七の惆悵痛さを忍へ顔を去のめて起んとすきと。雑巾桶へそっぽりと却合で入ツ。尻なまば身を揉ばのりて抜ぬ故 野良「アツアツアイタ、、、、エ、誰の來て起

して呉エ。アツタ、、、、アツタ、、、、アツタ、、、、。尻へ何の喰付の。アツタ、、、、。飛八の天窓へ冠とし火入をどり「灰が目と口へアツアツアツ。ハックシヤウ。ハアツ。ハックシヤウ。プツプツ」何だ是主の顔の。ヤ〜雪降の化地藏ちらもんぶ 野良「アツアツアイタ、、、、。飛八早く起して呉ねへ」エ、夫所の。アツアツアツハックシヤウハックシヤウ。此内お麥の野良七が手首を持って引起せ。野良七顔を離めながら「チャ〜尻ぐびツまよりだ」何處もお怪我の成さいませんの 野良「イヤ〜お怪我の無いが桶類が有るので尻がそっぽり入ツのだ」此時喜次郎の手拭にて飛八の天窓をとさながら「イヤハヤつさらねへ面お成ツ。エ、眼を明て往ねへ。物を高く買このを買冠りといふがお前の灰かぶりだ。淺間の山の焼の時小やア此様な亡者が幾箇も出るといふ事だ 野良「今の野良の何處へ往」喜次「床机を立と直お種なし蕃椒だ」どうせ此様事だらうと思ツ 野良「歩行らんびお腰ツ骨が。アツタ、、、、。飛「まだ灰が鼻の穴へ。ハックシヤウ」一同ツツハ、、、、。○爰お

亦また助はすけと下へ太郎たろうのきん鹿ろく呂ろ松まつ。茶ちや目め吉きち。大たい恩いんといふ三人さんにんの味あじ方かた出で来きけまば。喜き次じ郎らう。飛とび八はち。野の良りやう七しち等らうを打うち驚おどろうして腹はらいせせんと梅うめの本もとの容よう子すを探さがるよ。案あんの如ごとく喜き次じ郎らう等らうの麥むぎ湯ゆの見み世せの仕し舞まを待まちひ麥むぎお白しろ湯ゆが我わが宿やどへ歸かへるを送おくるといふを聞き。助はすけ。下へ太郎たろう。鹿ろく呂ろ松まつ。茶ちや目め吉きち四人にんの者ものの手て拭ぬぐひで顔かほをくるりと押おし包ひき。尻しり引ひかきげ腕うで捲まり手て毎ごとく持もつる棒ぼうの折を。大たい恩いんの一人ひとり五分ごぶん月げつ代のかづら髪かみを冠かぶり黒くろ羽は二に重かさねの小こ袖そでを着きこんで狭はみ帯おび。長ながき朱しゆ箱はこのだいせう流りゆう石せきよ暑あつき水みづ無な月げつや顔かほに玉たまの汗あせをかき。大たい恩いん。深しん更こうに及および別べつして泉いづみ城じやうが甚はなはまく成なつた様やうでげすナ。下した。綿わたのといつゝ物ものを着きると時じ候こうが蒸むして来きると云いふのめづめな譯わけさ子こ。跛こ。「免めんも角かくも土ど川がわのうちよ綿わた入いれて着まて居ゐる位くらゐな我わが慢まんが無なッちやア追おい追おいの親おや方かた林はやしわやアなきめへサ。茶ちやめ。此この道みちを通とおるよ遠ちかへい有ありなア。鹿ろく呂ろ松まつ。「連れん中ちゆうと知しりながらも強こゝらまく見みえるうちが宜いぢやアねへり。跛こ。「其そのとづた土ど川がわの裡うちよ綿わた入いれて着まこんで居ゐる人ひとさへ有あるだものナ。茶ちやめ。「何なんよまてても今こん夜やの月つきと云いふ而いつらも明ありが有あり宜い。鹿ろく呂ろ松まつ。「ヤア畜ちく生しやうめが頭あたまを持もつ上うやアガツて吠ほる存ぞんトよりぢやアねへりの。ト云いふうち大たい恩いんの足あしもどよ寐ねて居ゐし

犬いぬガワン／＼と大たい恩いんの裾すそへ齧かみ付けバ悔いり「ヒヤアあアエ、下した。大たい恩いん先生せんせい何なん故ご地ち平へいを這はて歩あ行ゆくのだ。大たい恩いん。「オホン斯か犬いぬどもに吠ほらまゝ折をら四よッ道みちに這はて歩あ行ゆくと吠ほ止やと云いとい甲か斐ひの信しん玄げん公こうの教けう也なり」と云い時とき犬いぬの狂きやうッてワン／＼と天あま窓まどを自おの懸かけ齧か付けかゝるに大たい恩いんの仰おほ天てん「ヒヤアあア下した。太郎たろうさん助たすけ玉たまへト震ふるへ上あぎバ下した。太郎たろう棒ぼうを振ふ上あぎて畜ちく生しやうめらアト彼かの犬いぬを打うちに懸かきバ犬いぬの猶なほ吠ほ付け聲こゑで軒のき下したに寐ねて居ゐし犬いぬも。まな起お出で八はち方ほうよりして吠ほかゝるに。茶ちやめ。「エ、思おも々々ままい奴やつら等らだ追おい追おいの拂はらつて呉くれベエ。下した。太郎たろう。「腕うでッ節ぶしを見みせて遣やう。跛こ。「已お自ひが此この方かたのさうの畜ちく生しやうめらを。あゝまやアぢん／＼。あゝまやアぢん／＼。犬いぬの彌や／＼吠ほかゝまバ。茶ちや目め吉きち。鹿ろく呂ろ松まつ。下した。太郎たろうもおなトく棒ぼうを振ふ上あぎて地ち平へいを。びまや／＼叩たたきなから「あゝまやアぢん／＼。あゝまやアぢん／＼。大たい恩いんの犬いぬの逃にげるを見みて嬉うれしさうに躍はね上あり「オホンあゝまやアぢん／＼。あゝまやアぢん／＼。折をら彼かの方かたの鼻はな唄うたを。下した。太郎たろう早はやく聞き付けて「ヤア彼あの聲こゑの飛とび八はちだせ。茶ちやめ。「ホン、夫それに違ちがへ給たまへ。跛こ。「ヤレ／＼。喜き次じ郎らうの聲こゑもすらア」大たい恩いんの猶なほ吠ほ上あり「オホンあゝまやアぢん／＼。跛こ。「何なんにしても大たい

愚さん○追剝の親方が扱衣に成て居ちやア恐怖をう薄い 大「其處らに懸念し玉ふな。諸事下僕が胸三寸ツ 下太「今のあゝとやアぢんくで跋て居たか手際ぢやア何をさしても大丈夫だ 茶め「もう些片ツ隔へ寄て居やう 虚呂「夫がいゝと其處なる家の軒下に待とも知らぬ喜次郎の 飛八「野良七諸ともにお婆お白湯と打連だち。枝豆賣の親父さへ來かゝる道の無多口に 野良「跋助や下太の何ぞさう 飛「大方此人らの仕業だといふ事を監探ツて茶目吉や虚呂松の所へ意趣げへしの相談にでも往さう 喜次「お婆さん其様に先へ往と犬が吠るせ 茶「オヤ否だ氣味の悪い 大「もう七ツだらねへ」ト云時遙々鐘の聲ポチャン軒の下より跋助の大恩の尻を衝突て「い、せく」大「まアづ待玉へ。犬めが頭を持上さから 下太「其様な事を云て居ちやア通り過らアな 大「然らば出ませうのナ。オホン何の追剝も致し付ぬと場うてか致さで」トじづく爲るを跋助も腰へ手を掛押出さる憑據なく往來へ出の、りりししが亦戻り 大「其處エらよ蛇目の傘てふものが在やし」ツツけ 下太「傘を何よするのだらう 大「是は近頃尊大人の勅定とも

思ひ侍らばス。定九郎の役を勤て蛇目の傘を持ねへと云のと。神武此方ないて茶「往ねへせく」 下太「定九郎の役を爲るのからだが追剝の親分を遣るのだから天氣の宜の又傘を差て出ちやア宜ねへせナ 大「然の玉へども御會子牛若丸なぞハ 跋「何でも宜のら早く出のけなくツちやア往ねへ。アレ僉立止って仕舞」ア「此時喜次郎ハ先よ」ツツて歩行りししが。今軒下より押出されし大愚が姿をちらりと見て忽地其處へ立止り 喜次「オア僉が待ねへ。何だの可怪な事か在のら 野良「何故」 飛「幽霊でも見ねたと云の」 喜次「なア又幽公ぢやア糸へが。アレ彼處の軒下より黒粧束で長い刀をさした奴が一寸出て。此方人の容子を窺ひ直に引込だのらヨ 野良「正當の○エドレ」 飛「彼處の軒下の○や何の居るせ。ナヤ居るせ」 飛「へん案事なさんな湯屋の煙だ。へん大造な事と云んぢやアねへけれど二本差た奴が恐怖くツて焼豆腐が喰れるものツ。サア自己の後へ付て僉が歩行させへ。」「そんだ事を云」ツツて主も震へて居でねへの飛「へんよしても呉んな江戸ッ子だア。ト口には云へど大の臆病足の進ま見えたり





おあつちよ  
 御新天  
 人の目よ  
 侍くたさ  
 刀

たり

編者曰大愚のヲホン先生よせば宜に盗賊の魁首に成て呉れよと無分別にも頼まれ  
て例の自慢で押出し喜次郎等と丸ごだかにしたる其結局が彼の枝豆賣の田舎翁に  
取摺られ親にも見せぬ物品を捨り切るゝ其痛さハツと馬鹿理に氣も轉倒遂に双方  
中裁に至る。其後又柳橋の能樂亭に寄集ふ。頃ハ暑さも打過て秋の夜雨の思ひ付き  
百物語話の一趣向。偏人の悪口大愚をして莊周の夢。盧生が寐言と言しむる可笑  
味その中にあり。諸百物語話ハ六怪選舉の順番定まり第一番の關ハ喜次郎に當り  
(あさい心意と白糸の)ト淨瑠璃文句を入れたる幽霊の仕打。又二番目の茶目吉が茶  
椀の中に入れてたる天狗。其次之下太郎が財布の中より河童を出し。又殿助が糞入よ  
り種々奇スゴミを見せ。尋で虚呂松が長崎の強飯と云ふ場合に至りて大愚その  
殿を苦しむ等の事柄之第四編に顯せり「但し第四編以下の今七八日の内ハ續い  
て出版仕まつりませれば相變ふす又御高評を願ひ上すする」

妙竹 七偏人第四編之序

徒然なるまゝ、お日ぐらと硯おむかひて七偏人の四  
編の序文。ハテ何とこした物たやらと思案よ出子を廻  
らせど。下手の考案休むの喩竹の林お名を得しの中  
華おてハ七賢人。我朝おてハ竹取の翁が娘赫奕姫。彼  
虚つきの彌次郎ハ竹の放屁の音おひびき竹にかり  
たや七九竹。心の竹ハ小唄の一ト節奏ハ見ゆぬ竹簾  
竹の子笠お面をかこし竹鎗さけしハ竹智光秀。小田  
の蛙の音おさく。鶯はやき梅亭ぬしと。名乗て見れば  
竹馬の友垣。されども腹の布袋竹よ。およばぬ余ハ青





皮のむけぬ愚才の竹奴矢竹で、ろよはやれども弓  
 とのからぬ寒竹の筠燈臺をか、けつ、木竹を次  
 百物語例の滑稽妙竹林話竹八千代の賣物に廻ら  
 ぬ筆の今年竹燈心ではる根かと言を竹の柱にもた  
 れつ、東叡山下の竹窓に述。

岳亭春信

妙竹 七偏人四編卷之上

東都

梅亭金鷲編次

再説下太郎。跋助ハ盧呂松。茶目吉。大愚等を自己が味方に引付て喜次郎。野良七。飛八  
 が。麥湯の女お麥。お白湯の見世を仕舞て我家へ歸るを送るその道に。待伏あして思ふ  
 ま。打驚かして遣んものをも。更てハ淋しき片側町の月影届ぬ軒下よ。顔を包み姿  
 をのへ待構へしとの露知らぬ。喜次郎。飛八。野良七ハ兩個の者の察しよ違はず。麥湯  
 の女を送らんとて枝豆賣の老父をも。連て此處まで來かゝりしが。喜次郎早くも軒下  
 よ。大愚が有漏つく姿を見いだし。怪み恐怖て立止まるを。飛八ハ力身うへり「コウ  
 が自己の後方へくッ付て來させへ。ハ恐怖と思やア恐怖し。亦恐怖ねへと思ッても  
 少しやア恐怖け終ど。荒木又右衛門や宮本無三四あんどハ。野良「お前ハ強しよう。強い  
 うらさッさと先へ歩行ねへ。喜次「コレサ飛公後方へ付て來いといふか。愈々後方のは  
 うへ廻ッて居るのに何と監えて。ろんお身振をして居るんだ。ぐんぐんと歩行ッしあ



光せて。持る捧を大地へ突たて大恩が傍に立んだかり。可笑さ吞込作り登りて「コレ  
 サ親方。うまく鳴が掛たのに。忠臣蔵のせりふめか。た洒落をころちやア有やすめへ  
 ぜ。」左様ともく。サア親方まんま押し此奴を。自己ツちの手で料理うか。但し  
 の朱鞘の新身のためし。大恩「テヨツ不景氣か。アレ向ふよ寝て居る白犬が。下太「ハテ宜  
 こんす。四邊の事にお構ひなく。大「犬もあかざア打れめへに。益ねへ聲をして吠るッ」  
 此時鹿呂松。茶目吉。いつか喜次郎。飛八。等が後方へまはりて道を塞ぎ。割鐘聲へふ  
 しを付。茶「彼様逃道を取れば喉の這出る所もねへ命が欲しくば衣ものを脱。成程「し  
 かし女の格別の情をもッて死して遣るが。男はきりく脱やアがれ」ト持たる棒を振  
 ちふし。地平を破然と打たけは。前に立たる下太郎も。跋助もまた棒振まひし。兩人「ぐ  
 づくせずとサア脱」是も地平を叩きまひせば。飛八。喜次郎。野良七。のびまやり  
 くといふ度に。胸りくくと飛あがり。飛「エ脱ますく。喜次「此様とたららと思ッ  
 たから立止つたに。お前が力身で。テヨツつまらねへ。野良「エ飛公。自己の何とか言

譚をして呉ねへな。裸に成ておひ剥さま差上ても宜けれど。お前も知ッてゐる通り。  
 弟の衣物を持逃どうせんにして借てきたのだから。下太「應サ舍弟のきものを着逃に  
 しても見榮が考へへのなら。きものゝとるめへ。其かわりたつた一ツの命を賣ふかイ  
 何せ自己ちに見入れちやア。ねこよあれた坐敷の小鼠。たとへ鼠の術が道て地  
 の中へもぐり込入うが。雷獸の性を受けて猫の上へかけあが龍が。引虎めへて皮をい  
 とうともどもさアねへ。狐の皮の頼財ふか。狸の股の金銀を。猪の十六文も残さず。  
 煙にひせた。猪と思ッて剛の際期鹿諸共。麒麟きり駄して去まゑ。一棒組のいふ  
 通り。此御端へ軒端の蜘蛛の網をはッて。埃とも武玉子湯と。着すぎた来た油虫の。我  
 から火にいる夏虫めら。螢の尻のあかるいうら。つくく惜いと啼すとも。衣服の蟬  
 のはだか虫。くそ溜桶の蛆とせずと。さる興虫かけられて。聲さへ出されぬ糞虫と。あ  
 きら蚯蚓に子子の。浮まづみ蟻はねばつた。ころりとまたる半虫が。胡蝶の夢を見た  
 おもひ。蠶虫のきりく。と。身ぐるみ蠅で其處へ蝶サと言ハ彼方の茶目吉が。網の真



〇七偏人

第四編卷之上

〇七



ねんがせと  
 ねんがせと  
 ねんがせと  
 いのよまじ  
 ねんがせと  
 ねんがせと  
 ねんがせと  
 こころがせ

〇七偏人

第四編卷之上

〇六



似をする鳥の素野良。水鳥の喰へねへで麥湯の處女の類白鳥や。内またぐらの羅羅鳥の毛をひ白さき。ちんく鴨の。うまひ嘶に鸚鵡とい。七面鳥にもふとつたる。御堂の驚ひるてんの。木兎面との鴛鴦が強へ。ユレ自己の様ない。顔鳥で。程や愛相も行々子の。錢まひりさへうありやでも。四十雀の大年増。自由八九の新造ッ子が。平色鳥といふ譯でもねへ。サア杜宇のてッペン掛て。家鴨のねらふ種先の先まで。鴉を思ふ夜の鶴。妻こゝ雉子の啼面せずと。後の厂が先にさつたらかふがい取ちよと。衣服も帯も鶴て其處らへ一所に乙鳥。積鼻輝までも鶏のとつて鴉りする裸。風風寒いと雀納涼「ト少し反身でせりふめかせば。虚呂松も御舎にかゝり。沙魚彼鏡ひまう鯛みつ。月さへ干鯛に大鯛を。めぐりて野魚の山の鱧。腕黒鯛になるこそ僥倖。何瀬出雲の蟹鯛よの見はなされたる四文やの鯛で女の見むきもせぬ。鯛の烹付の鹽辛か。あんばんだんの置て來里。良。せささい河豚はを面を脹らし。たとへ鯉と思つても。茶灌の章魚で手へ出せめへ。鯉うきよと諷めて。鯉のさし身にされねへうら。鎌倉海老の腰を折。平目も成て誤つて。

金魚もさんばも鱧鮓の。袋の中から鱧け出し。命の泥鰌かたすけと。合せ鱧の手の平で。念牟豆申して鯛魚たうへ。裸に成て衣服を脱。古かぬ買は鯛こかし。酒やへはこぶ錢龜や。お女郎買の金に鳥賊たア」と身ふりて白眼は犬思も圖に乗。端折し襦をゆり直し刀の柄へ手をかけて。何ッ言んときたれども根が不需用な生れゆゑ口をひぐく爲るばかりで一言半句も出ざりしが。不斗思ひ出す越年の晩に聞たる青物盡し。是僥倖と嘆拂ひ「チホンあゝ目出度な(チホン)目出たいな目出たさ今宵の追刺に。青物盡しで威張まじよ(チホン)一夜明れば元日で。門に松茸しめ菜山葵。羽子鯉鮓と(チホン)あね山椒。二日のわたかぶ蓮柚めよ。三ツ葉蒲團を敷かさ葱。チホン。二ツなぐへた真桑瓜。旦那の東捕塞の大あたまへ。彼ももん菜のぬぐめきを。胡桃くるみと付蕪。御新造さまり混布卷の(チホン)帯を解手の早蕨よ。海羅の紙を揉大根。そろく根芋や人參に。サア新午房ちね生姜と。既にあや款冬その折から。惡魔外道の番椒。ちん風れん草むっ蓼で。鳥芋ところか冬瓜の。白粉つけた顔を出し。何を茄子といふ所を。八百屋





〇七偏八  
 後のおおひ  
 振るまへ  
 金  
 〇十二

